

査読論文

現代台湾史における泰緬孤軍イメージ ——本土化の不徹底を示す一事例——

若松 大祐*

要 旨

本稿は、現代台湾において泰緬孤軍と呼ばれた人々の担ったイメージの変遷を考察し、現代台湾のナショナル・アイデンティティが抱える難題を明示する試みである。台湾の言論空間では基本的に彼らを同胞として位置付けており、時系列的に言えば、義の同胞、難民、華僑、新移民などの異なるイメージで理解している。

泰緬孤軍イメージの変化は、現代台湾が（事実上の）国民国家として持つ自己意識（ナショナル・アイデンティティ）の中国的なものから台湾的のものへの転換と関係している。「我々」はかつて反共が声高に叫ばれた時代に泰緬孤軍をもてはやしたものの、今や台湾らしさが重視される時代になると、「在台湾」（台湾で）の歴史的経験に結びつかない泰緬孤軍を、「我々」の一部に位置付けることに、違和感を感じ途惑ってしまう。

キーワード

台湾化、北タイ、異域、新移民、残留部隊

目 次

はじめに

- 一、東西冷戦下の泰緬国境地帯における国軍：1950年代の知る人ぞ知る軍事活動
- 二、国共内戦下の義の同胞：1960年代 -70年代のイメージ
- 三、共産主義の被害者としての難民同胞：1980年代のイメージ
- 四、タイにおいて支援すべき難民華僑：1990年代 -現在のイメージ
- 五、台湾において支援すべき難民華僑：1990年代 -現在のイメージ

はじめに

2011年、中華民国百年の元旦、台北市中心部にある総統府の前で開催された国旗掲揚式典に、泰緬孤軍の子孫なる人が登場した。それを予告するネット記事の見出しは、「我々はみんな一

* 執筆者：若松大祐

所属/職位：京都大学 学際融合教育推進センター・アジア研究教育ユニット／研究員（特別教育研究）

連絡先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町 文学部東館2階

E-mail: dwakamatsu@yahoo.co.jp

つの家族である！泰緬孤軍後裔、チベット人、新住民、顔面損傷者、元旦に国歌を高らかに歌う」であった¹。後日談として、国旗掲揚式典に登壇した孤軍後裔は、数日後に不法滞在が発覚し拘留されたという²。出自の異なる人々が暮らすのは、台湾の古くからの特徴であり、特にここ20年ほどは国家がそれを住民の多元性として強調している。ただし、その具体例として登場した人が実は不法滞在だったというのは、一体どういうことなのだろうか。そもそも台湾にとって、泰緬孤軍とはいかなる人々なのか。

本稿は、現代台湾³が泰緬孤軍に投影したイメージから、台湾側の自己認識が持つ難題を探る試みである。本稿が取り上げる泰緬孤軍とは、国共内戦に敗北した中国国民党（以下、国民党）が1949年に中華民国を台湾へ撤退させた後も、将来の中国大陆奪還のために雲南省（略称は滇）に近いタイ（泰国）とビルマ（緬甸）の両国に残留させた軍隊であり、1980年頃まで特に北タイ山岳地域を占拠していた人々である。

ただ、この定義は現代台湾の言論空間⁴でしか通用していない。確かに2000年代現在、北タイには総人口7万余り、100を超える華人村があり〔石炳銘2008：12〕⁵、華人村の成立と展開には、泰緬孤軍が切り離せない存在にある。しかし、北タイの華人は泰緬孤軍ではない。今の北タイの華人のうち、いったい誰が泰緬孤軍（およびその子孫）であるのかをもはや私たちは把握できない。というのも、かつての泰緬孤軍は半世紀にわたり周辺の諸民族との通婚や交渉を繰り返し、特にタイ国への帰化を経た結果、実に多様な社会的背景を持つに至り、もはや泰緬孤軍なる一つの完結した集団として存在していないからである。にもかかわらず、台湾では単一の存在として今なお泰緬孤軍を想定している。従って泰緬孤軍とはそもそも、現代台湾の言論空間が意識的または無意識的に特定の事実を選抜し、単一のイメージを彼らに当てはめることによって生み出された概念と言えるのである。

現代台湾ではこの半世紀の間に泰緬孤軍に大きく注目してきた。台湾の言論空間では基本的に彼らを同胞として位置付けており、時系列的に言えば国軍、義の同胞、難民、華僑、新移民などの異なるイメージで理解している（実は国軍はイメージではない）。いずれのイメージもそれぞれの時代において台湾の言論空間をにぎわせた。そこで本稿は四つに時期を区分し、泰緬孤軍がまとったイメージの内容を時系列的に考察したい。

さて、泰緬孤軍はこの半世紀間にわたり台湾で常に注目されてきた存在であるから、先行研究も蓄積されてきた。大きく分けると三種類の先行研究がある。第一は、泰緬孤軍とよばれた人々の泰緬国境での活動に関するものである。1949年以来中国から来た彼らが当初従事していた軍事活動⁶、その背後にあった経済活動⁷、中にはアヘン栽培の絡む薬物交易⁸、近年の泰緬孤軍（の子孫）の現状⁹に関する考察である。泰緬孤軍を含む北タイ山地のエスニックマイノリティーや中国系住民を論じた民族誌もある¹⁰。第二は、泰緬孤軍とよばれた人々が中華民国へ帰国（つまり台湾へ移住）した後に展開した活動について、考察したものである。例えば、桃園県に住む人々へのインタビュー¹¹、南投県でのコミュニティー建設¹²についての研究がある。

第三は、泰緬孤軍とよばれた人々を支援する台湾側の活動に関する考察である。これには中華救助総会の刊行物や記念誌が筆頭に挙がる。当初のタイでの支援¹³、近年の台湾での支援¹⁴についての考察も見過ごせない。

以上のように、泰緬孤軍の実態に迫る実証的な研究が多く展開されてきたものの、先行研究には次のような課題が残っている。現代台湾において泰緬孤軍がまとったイメージが変化しているにもかかわらず、そもそもイメージに関する研究がなく、またイメージの変化についてはほとんど議論されてこなかった¹⁵。

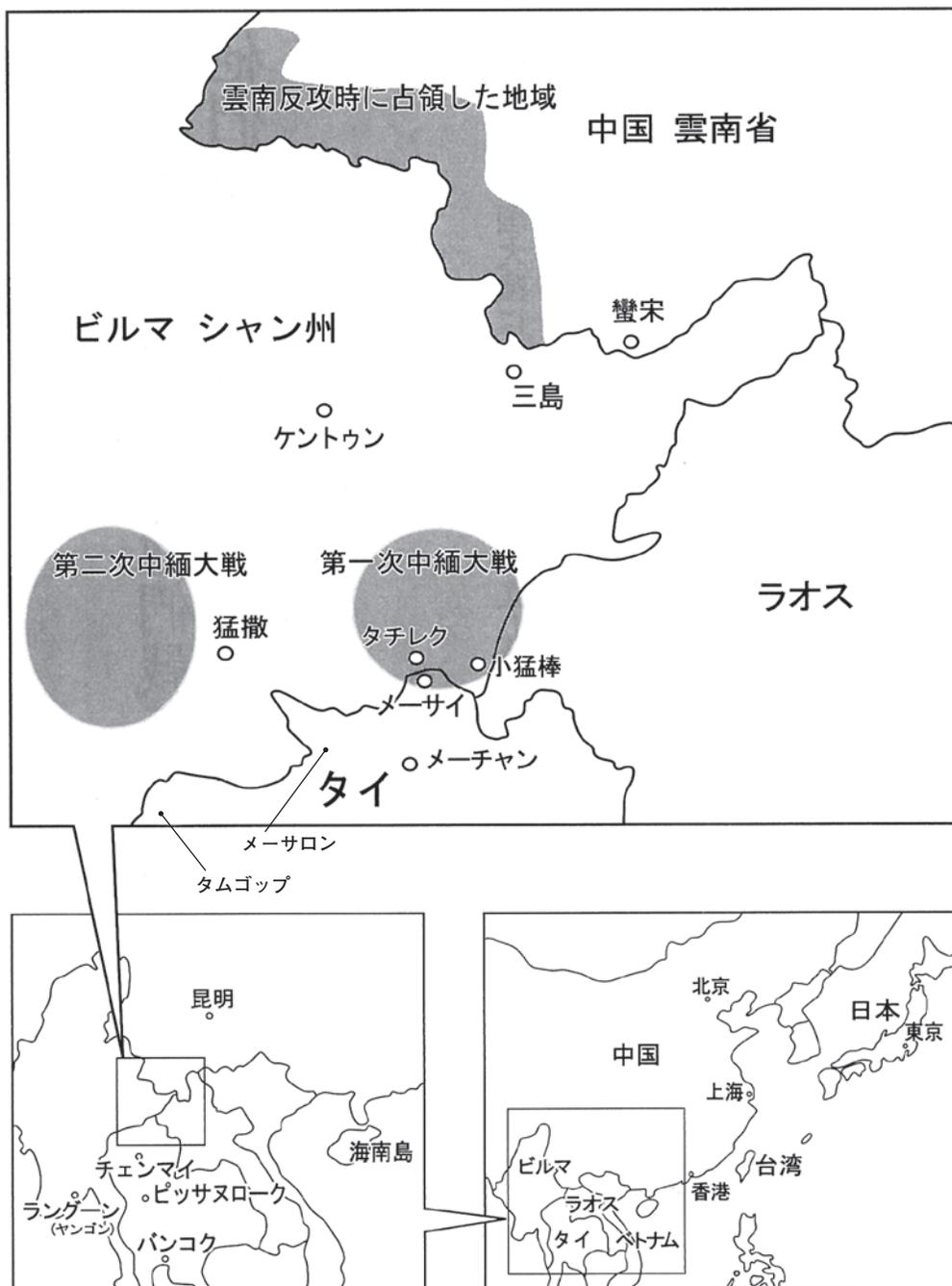
実は、泰緬孤軍イメージの変化は現代台湾史の反映であると言え、しかも現代台湾史の抱える難題をも示唆している。現代台湾史とは、いわばそこに生きる人々のナショナル・アイデンティティが、中国的なものから台湾的なものへ転換するプロセスである。通常、これを「本土化」（台湾化）¹⁶と呼ぶ。ナショナル・アイデンティティが転換した後も、泰緬孤軍は一方では常に「我々」（国民国家的な主体）の構成員として位置付けられている。しかし、いま一方で、台湾の言論空間において、泰緬孤軍が新たなアイデンティティの下でも構成員であり続けられるのかどうか、違和感がただよい、その違和感は近年増幅する傾向にある。そのため、泰緬孤軍に付与されたイメージおよびその変遷を把握するという本稿の試みは、ナショナル・アイデンティティの転換が新しいアイデンティティにもたらし未解決のままになっている難題の存在を、私たちへ示す好事例になるだろう。

本稿は原則的に文献資料を根拠にしている。本稿の考察対象であるイメージへ接近するために、研究書や記念誌や回想録といった二次資料を相互参照した（互いに突き合わせた）。また、臨地調査で得られた知見も本稿の考察に大きく役立っている¹⁷。

なお、本稿は泰緬孤軍なる存在そのものではなく、現代台湾の言論空間で広く展開されたイメージの内容に注目した試みである。そのため、泰緬孤軍の個別具体的な活動や、中華民国（台湾）、タイ、ビルマの政府の政策決定にまでは分析を踏み込まない。また、本稿がこれから展開する議論で判明するように、現代台湾で泰緬孤軍としてイメージされているものの、地理的なイメージは実のところ北タイに偏っているため、本稿の考察でもビルマをイメージする話題はほとんど登場しない。

一、東西冷戦下の泰緬国境地帯における国軍：1950年代の知る人ぞ知る軍事活動

私たちは、現代台湾の言論空間で泰緬孤軍と呼ばれるようになった人々の担ったイメージを時系列的に探る上で、1950年代の泰緬国境に残留した国民党軍¹⁸の存在から語らなければならない。本節では先行研究を相互参照することにより¹⁹、泰緬国境の国軍と台湾との関係を考える上で重要な事件や事象について、時代を追って概観してみる²⁰。ここから、泰緬両国に残留した国民党軍はその当時まだ孤軍と呼ばれておらず、1949年から1961年まではあくまでも正規



「異域」地図 (1950年代)

柏楊 [2012: 4] より転載²¹。

メーサロンとタムゴップの位置は引用者による加筆。

の国軍として台湾側で認識されていたことがわかる。つまり、中国大陸の中国共産党（≡中華人民共和国）を敵だとすれば、台湾（≡中華民国）における国軍と泰緬国境における国軍の両軍は、共に国民革命の最先鋒に位置付けられており、前者が敵の正面にあるとすれば、後者は敵の後方に位置していると認識されていた。しかし、泰緬国境の国軍の存在は同時代の台湾社会でほとんど知られておらず、後の台湾社会で広まる泰緬孤軍イメージは、1950年代の台湾にはまだ存在していなかったことも指摘できよう。

1960年代になって台湾で泰緬孤軍と呼ばれる人々は、1949年の共産中国の成立により出現する。1949年、中国での国共内戦に敗北した国民党は、中華民国の中央政府や主要な軍隊を率いて大部分が台湾へ撤退する。この時、雲南省にあった軍隊の一部（約1,500人）が共産党への投降を拒み、越境してビルマへ移る。彼らは主に李国輝の率いる第八軍二十三師第七〇九団の残兵（約600人強）と、譚忠の率いる第二十六軍九十三師第二七八団の官兵（約800人強）とで構成されていた（両軍の人数には兵士の家族を含む）。この軍隊こそが、泰緬地域の土着の人々や新たに中緬国境を越えてくる中国難民との間で集散離合を数十年にわたって繰り返し、後に台湾側から泰緬孤軍とイメージされる集団になってゆくのである。

さて1950年5月、在緬の国民党軍が復興部隊として再編され、李国輝が総指揮をとる。6月、朝鮮戦争（1950-53）が勃発すると、米国は地政学的観点から台湾と雲南の重要性を認識するようになる。すなわち、人民解放軍（中国共産党軍）を中朝国境に集中させないためにも、米国は台湾海峡の中立を破って台湾を支持し、米華両国は中緬国境にある復興部隊を援助し始めたのである。

1951年1月5日、中華民国総統の蒋介石が台湾から雲南-ビルマ国境の国民党軍へ電文²²を送り、戦闘の継続を激励する。4月11日、国民党軍は雲南反共救国軍として成立した。総指揮部は **Mong Hsat**（猛撒/孟薩）に置かれ、総指揮は李弥が担当する。10月5日、反共抗ソ大学（反共抗俄大学、軍事訓練機関）が **Mong Hsat** に成立し、李弥が学長になった。兵力が3万人を超える。救国軍はサルウィン川流域に待機し、台湾海峡を越えて中国大陸へ攻め戻ろうとする（台湾の）国民党政府軍本隊の動きを待った。

1953年3月、ビルマは自国領に他国の軍隊が駐屯するのを悦ばず、軍を遣ってサルウィン川を攻めるも惨敗する。武力で負けたビルマは、舞台を国連に移し、中華民国の行為をビルマ領に対する侵略として訴えた。5月、バンコクで米華泰緬の四国会議が開催され、国民党軍の撤退が決まる。11月から翌1954年3月にかけて、タイの南榔（**Lampang?**）空港から7,000名（軍人+家族）が台湾へ撤退する（第一次撤退）。

1954年5月末、李弥が雲南反共救国軍の編成番号を取り消し、解散を宣言し、李弥は台湾へ戻される。これにより、国際社会の理解では国民党軍がビルマ領にもはや存在しないはずであった。しかし10月、中華民国政府は柳元麟を派遣し、軍事的支援を続ける。柳は部隊を雲南人民反共志願軍（全5軍）に再編する。柳元麟が総指揮をとり、第一軍は呂人蒙（仁豪）、第

二軍は甫景雲、第三軍は李文煥、第四軍は張偉成、第五軍は段希文が指揮を担う。

11月、雲南反共救国軍の関係者が連名で蒋介石へ上書して自軍の惨状を説き救助を訴えると、蔣は中国大陸災胞救済総会(1950年成立、理事長谷正綱、中華救助総会の前身、齊しく「救総」と略す)²³に命じて救援を始める[雷雨田2000? : 260]²⁴。

1955年、総指揮部がタイ-ラオス国境に近い江拉(Keng Lap / Kent Lai)へ撤退し、部隊を再編する。柳元麟が総指揮を執る全5部隊は、1961年の第二次撤退まで続く。江拉時期、中華民国は政府が台湾から特戦教導総隊を派遣し、訓練を指導していた²⁵。

1958年、中華人民共和国で三面紅旗政策(社会主義建設の総路線、大躍進、人民公社)が行われる。雲南西部で共産主義による統治を嫌った人々が暴動を起こし、一部が越境し難民としてゴールデン・トライアングルと呼ばれる地域へ逃避する。この機に乗じて7月に、雲南人民反共志願軍がビルマから雲南へ反攻する。ただ補給が切れたために、占拠は短期間に終わる。しばらく後の8月23日には、厦門沖の金門島で国民党が共産党の対台湾侵攻を止めている(第二次台湾海峡危機)。滇緬国境地帯での国民党軍の存在が、人民解放軍を台湾解放に集中させなかった一因にもなった。

同年10月に蒋介石・ダレス共同コミュニケが、米華は大陸反攻を武力(軍事)に拠らないと宣言した。しかし直後に米国は、もし中国大陸で反共起義が発生した場合に限り、中華民国が台湾から大陸の起義を軍事的に協力することについて認めている。起義とは中華民国側の呼称であり、義挙を指している。不義(この場合は共産主義を指す)に対して正義の行動を起こすことである。中華民国としては、今後の中国大陸で期待通りに起義が発生しなければならない。雲南人民反共志願軍は雲南での起義の発生(もしくは煽動)に関与できる。だからこそ、国際社会ではもはや存在しないはずの軍隊が、現実には滇緬国境地帯でしっかり待機しておかなければならなかった。つまり台湾を国民革命の前方基地とすれば、雲南人民反共志願軍は国軍の一部として、滇緬国境という敵の後方から中華人民共和国を攻撃する役割を担っていたのである。

1960年11月、中国人民解放軍とビルマ軍が合作して国民党軍を攻撃したため、国民党軍は江拉を離れる。メコン川を越え、ある者はラオスへ、ある者はタイへ向かい、少ないながらもビルマのワ州に拠る者もあった。なお12月20-24日、蒋介石は督戦のため秘密裏に蔣経国を猛不了(Mong Pa Liao)へ派遣している。

1961年、ビルマは再び国連で中華民国の領土侵略を訴える。米国の強い要請があり、米国から台湾への軍事的かつ経済的な援助(いわゆる米援)の継続と引き換えに、蒋介石はやむなくビルマからの軍隊撤退を命じた。こうして第二次撤退が始まる。これは蔣経国と米国中央情報局(CIA)の駐台事務所主任のRay Steiner Cline(克雷恩)²⁶が米華それぞれの責任者を務めたため、「国雷演習」と呼ばれた²⁷。3-5月、約5,000名(軍人+家族)がチェンマイ空港から台湾へ撤退する(第二次撤退)²⁸。1954年と1961年の二度の撤退は、ビルマ(外国)から中華

民国(祖国)への帰国という意味でもあった。

ただし、国軍がビルマに存在しないのは表向きの話であり、実は兵力1,500名程度が残留して北タイへ移っている。第三軍李文煥部隊はチェンマイ県タムゴップ(Tham Ngob, 唐窩)地区へ、第五軍段希文部隊はチェンライ県メーサロン(Mae Salong, 美斯楽)地区へと至る。両軍はすでに編成番号を持たず、政府からの補給や支援も得られないにもかかわらず、秘密裏に蒋介石の命を受けていたという[撒光漢2011: 39-51, 53-55]。蒋介石は将来の中国大陸奪還のために、第二次撤退の際に精鋭兵を選りすぐり、軍隊を引き続き泰緬国境地帯に残すよう望んだからであった。この両軍の将兵(およびその家族)こそが、1960年代以降の台湾で泰緬孤軍と呼ばれる人々の始まりである。

以上を整理すると、1949年から1961年までの国軍の性格について、次の2点が言えよう。第1に、泰緬孤軍という概念もイメージも当時はまだ無かった。滇緬国境地帯に残留した国民党政府の軍隊は、あくまでも正規の国軍として台湾側で認識されていた。その証拠に、政府から編成番号と一応の補給とを受けている。しかし第2に言えることは、そもそも台湾において、滇緬国境での国軍の存在は広く知られていなかった。十余年にわたる活動は軍事活動であり機密も多く、特に1954年以降、国際的には国軍が滇緬国境に存在しない設定になっていたからである。

二、国共内戦下の義の同胞：1960年代～70年代のイメージ

1960年代に入ると、台湾の言論空間では泰緬国境に残留した国軍を泰緬孤軍と呼ぶようになる。ここにおいて初めて泰緬孤軍という概念が出現したのだった。泰緬孤軍は「義胞」(義の同胞)というイメージで認識された。「義」とは広く「侠」(おとこぎ)であり、自らを犠牲にしても任務を着実に遂行することを意味する。こうした義胞イメージを確認するため、本節では、まず泰緬義胞というイメージを台湾に定着させた一冊の書籍を取り上げる。次に、義という理念の持つ意味を分析する。さらに義胞なる人々が台湾に定住した様子を考察した上で、義胞イメージが台湾の言論空間で普及する別の背景として、ちょうど当時の中華民国(国家側)が「義」を中国革命の重要な理念として宣揚していたことをも指摘しよう。

1961年、鄧克保『異域』(1961)という一冊の書籍が台湾で出版される。この書籍は、滇緬泰の国境地帯でなお戦闘状態にある国軍を孤軍として表現し、台湾に孤軍の名を広め、孤軍の事跡を台湾に伝えた。これから考察するように、『異域』はいわば現代台湾における孤軍イメージの原点であり、1960年代のみならず現在に至るまで、同書に触れずして泰緬孤軍を語ることができないほどである。

鄧克保という人物は李弥の副官という設定であるものの、実は架空の人物で、柏楊(本名は郭興邦、1920-2008)のペンネーム(つまりペンネームのペンネーム)である。鄧克保という

作者については謎に包まれてはいたものの、柏楊の優れた筆致のために、長らく実在の人物だと考えられていた。鄧克保が柏楊の創作であると判明するのは、1980年代初めになってからだった²⁹。

鄧克保が架空の人物である以上、フィクションである。しかし内容に関して、これがルポルタージュなのか小説なのか、文学研究者の間でも議論は分かれている³⁰。歴史家でもある覃怡輝によれば、柏楊は中国河南省の同郷人として李国輝と知遇を得て、李から一次資料を提供されている[覃怡輝2009: 2]。李は第一次撤退(1954)で台湾へ来ており、確かに『異域』の記述も第一次撤退までである。内容はやはり真偽が絡み合い混同しているものの、内容の真偽を考証しうるのはごく一部の関係者や学者や好事家であった。むしろ同書が爆発的なヒットを遂げ、息の長いベストセラーになったことを考えると³¹、広く台湾の言論空間では、鄧克保の語る孤軍がリアルなものとして受け止められ定着したと言ってよからう。

『異域』は、1950年から1961年の現在までも中緬国境地帯(ビルマ側)でなおも続く中国の国共内戦で戦闘中の鄧克保が、ジャングルの戦地から任務を帯びてバンコクへやってきて、一時的に潜伏している状況で、近年の戦闘活動を振り返って語るという設定で始まる。1949年の雲南陥落(省主席盧漢が共産党へ投降)から始まり、鄧克保や李国輝らの下級将兵が中緬国境地帯の過酷な環境下で奮闘する様子を物語る。同時に、李弥ら上官が下級将兵の犠牲を背景に、バンコクや台北で優雅に過ごす生活をも描いている。(ただし最高指揮官である蒋介石への批判はなく、言及自体一切なされていないところが興味深い。)この強烈な善悪対比が、台湾で国民の同情や義憤を呼び起こし、洛陽の紙価を高らしむ売れ行きをもたらした。政府は鄧克保の語りによって李弥ら上官の行動が国民に誤解されることを恐れ、『血戦異域十一年』(『異域』の原題である。つまり[鄧克保1961?])を発禁処分にしたのだという[覃怡輝2009: 1]。改題した『異域』がまもなく出版され、発禁処分になることもなく、大ヒット作になった³²。

『異域』が扱っている内容は、1950年代の前半における軍事活動であるものの、それが読まれ出すのは同書出版の1961年以降である。その際、かつての国軍の活動は、今や義という理念に基づき語られているのであった。従って、『異域』に登場する李国輝や鄧克保は、「義」の人として英雄視される。

では「義」とは何か。『異域』のラストシーンで鄧克保が操縦士から教わり、そこで示された義とは、自らが担った任務をきちんと遂行することであり、たとえ自らを犠牲にしても、途中で放棄はしないことを意味していた(『異域』第六章の五)。それ故に、鄧克保は「生存を賭け、自由を求め、苦勞を共にした」戦友への「千秋道義」(永遠の道義)のために、中華民国への帰国を放棄し、台湾へ行かず泰緬地域に残るのであった(『異域』第六章の七)。確かに鄧克保は国軍の官兵であるから、その任務の目的は反共、そして故地を奪還することである。しかしながら、彼が自ら誓ったのは、先に逝った戦友と同じように、任務の貫徹に生き、そして死ぬことであつたのだ。

1954年および1961年に滇緬国境地帯から撤退し、中華民国へ帰国するという意味で来台した国軍の兵士（およびその家族）たちは、台湾で「義胞」（義の同胞）と呼ばれ³³、台湾に根付いてゆく。『異域』がベストセラーになり、継続的に高い売り上げを誇っている同じ時期（つまり1960年代以降）に、滇緬国境地帯からの兵士とその家族が台湾各地で暮らし始める。これも彼らの存在が台湾社会に知れわたる一因となった。

滇緬国境地帯からの義胞は、台湾の各地に配置されている。配置先のほとんどは榮民眷村（退役軍人およびその家族の住むコミュニティー）や農場である。中でも桃園³⁴、南投³⁵、高雄、屏東に多い〔尹光保・葉瑞其2011：40-41〕³⁶。さらに基隆、台北、台東、花蓮、宜蘭にも彼らのコミュニティーがあった〔仁愛郷清境社区發展協会2005：44〕。よって当時の台湾住民の感覚として、義胞の存在は全く見ず知らずのものではない。『異域』の普及に加え、決して機会が多くはないものの、義胞と何かしらのきっかけで接触する機会があったからだ。学校の同級生や仕事の同僚に義胞の子女や関係者がわずかにいた、と今なお回想する台湾人も少なくない。

ここでの「義」は、中華民国という国家にとっての「義」であった。それは、国民革命に貢献したと看做された人々に与えられた理念である。例えば「中国国民党黨員守則浅釈」（1951）では、義は「四維」（礼義廉恥）の一つで、「至極正当な行為であり、慷慨しての犠牲であり、革命理論に対する実践である」と説明され、国民革命の成功のための基礎に位置付けられていた。1960年代後半になると、中華文化復興運動のために新たに宋明理学（儒学）の要素が加わるものの、基本的には国民革命への忠義という従来の意味を継承している。

1960年代に国家側は「義」を掲げているから、『異域』によって泰緬孤軍に与えられた「義胞」（義の同胞）というイメージを、国民革命に忠義を尽くす同胞という国家側の意味で強引にかつ都合良く抱え込み（あるいは読み替え）、称讃し宣揚することが可能であった。確かに良く考えてみれば、『異域』の説く「義」は任務の貫徹であるため、任務を貫徹せず滇緬泰から台湾へ撤退した人々に「義」があるとは言えない、とも解釈できるはずだ。にもかかわらず、当時の中華民国は国共内戦の枠組みに基づき、唯一合法の中国として中華民国を選び台湾へ撤退してきた中国人を、「義の同胞」であると看做したのである。（反対に、北京の人民共和国に頼れば、「不義」や「変節」と看做された。）こうして、台湾へ撤退した泰緬義胞や『異域』の読者が持つ「義」に関する個々別々な信条や感想は、国家側（実は革命政党側）の「義」が主流となる1960年代台湾の言論空間において、主流と直接衝突しない限りで存在を黙許されていたのである。

要するに、1960年代から1970年代までの泰緬孤軍のイメージについて、次の2点が言えよう。第1に、1960年頃から泰緬両国に残留した国軍が、台湾において泰緬孤軍と呼ばれるようになる。これは鄧克保『異域』（1961）の影響が大きい。泰緬孤軍の台湾への撤退も、彼らの存在を台湾に広く知らしめる一因になった。第2に、泰緬孤軍は義胞（義に生きる同胞）というイメージを帯びる。「義」とは、犠牲をいとわず自らの任務を貫徹することであった。また「義」

は当時の国家が国民革命の理想として重視する概念であったから、義胞は国家にとって都合の良い存在として看做され、その存在を称賛し宣伝された。

三、共産主義の被害者としての難民同胞：1980年代のイメージ

1980年代に入ると、台湾の言論空間では泰緬孤軍を、新たに「難民」というイメージで認識するようになる。ここでの難民とは、共産主義の被害者であり、救援すべき同胞であった。こうした難民イメージを確認するため、本節では前半において、まず難民（もしくは難民同胞、中国語原語では「難胞」）というイメージを台湾に定着させた一冊の書籍を取り上げる。そして北タイ難民に関する支援活動が台湾で勃興した様子を考察する。次いで後半において、1980年代台湾における国家（つまり中華民国）にとっての難民の意味を分析し、それが共産主義の被害者にほぼ限定されていたことを指摘しよう。

(1) 難民としての発見：同胞の惨状

泰緬孤軍は1980年代になると、台湾の言論空間で難民として理解される。この際、またもや柏楊のルポルタージュがきっかけになった。ここではこのルポルタージュが伝えた難民イメージ、そしてそれとともに台湾で出現した支援ブームについて、考察してみよう。

さて、柏楊は国家と国民の関係を挑発したという廉で1968年に逮捕され、なんと1977年によりやく釈放された³⁷。釈放後の1982年、大手新聞社『中国時報』の提案を受け、かつて自著『異域』で取り上げた地域を実際に訪ねる。柏楊の取材は、『中国時報』に連載して台湾へ伝わり、連載終了後すぐに一著にまとまってルポルタージュ『ゴールデン・トライアングル、辺境、荒城』（すなわち [柏楊1982]）となる。ただし、そこには義胞というイメージはもはや存在しなかった。では、柏楊はどのように孤軍を描いたのだろうか。ここで先行研究を相互参照しながら事実関係を踏まえ、柏楊のルポルタージュに即し、同書が伝えた孤軍イメージを浮き彫りにしよう。

1961年以来、北タイに拠っていた第三軍李文煥部隊と第五軍段希文部隊は、中華民国政府からの支援が得られない状況下で、時に商品作物としてのアヘン栽培に手を染めてでも、現在までの20年間をなんとか生き抜いてきた。1970年秋、内戦に悩まされていたタイ政府から連合剿共計画³⁸を持ちかけられ、両軍はタイ政府の管理下に入る。タイ政府は1970年の閣議決定で、泰緬孤軍とその家族を難民として認知し、タイ国軍最高司令部直属の〇四指揮部の監督下に置く³⁹。そしてタイ国内での居住を認め、同時にその代償として、泰緬孤軍を秘密裏にタイ共産党剿滅事業に投入する方針を定めたのだった [片岡樹2004: 195]。1978年5月30日にはタイの内閣が、人数制限なく両軍の勲功者にタイ国籍を与えるというタイ国軍最高司令部の提案について、批准する [覃怡輝2009: 323]。1981年の考柯 (Khaio Kho)・考牙 (Khaio Ya) 戦役で

勦共を完成させ、指揮官の陳茂修⁴⁰をはじめとする勲功者は1984年までにタイ国籍を取得するに至った⁴¹。ただしタイ国籍の取得には勲功者であることが大前提であり、その対象者として認定されるためには様々な項目があって、北タイ孤軍関係者なら誰もが容易に取得できたというわけでない [覃怡輝2009: 295-327]。

また、柏楊のルポルタージュは、台湾の言論空間で泰緬孤軍と呼ばれてきた人々の構成内容を改めて紹介している。孤軍は、かつて『異域』が描いた国軍（およびその家族）のみならず、今や例えば孤軍が戦闘に際して徴募した泰緬地域の中国系住民⁴²、文化大革命の中国から逃れて越境した中国人⁴³、ビルマ共産党からの転向者、そして泰緬地域の山地民などをも加え、様々な背景を持つ人で再構成されるようになっていた。ただし泰緬孤軍が換骨奪胎されて、北タイ山地における既存の集団のカテゴリーのいずれかに組み込まれるようになったというより、むしろ逆に泰緬孤軍が所与の自律した一集団としてまず存在し、それが補強されたという脈絡で、ルポルタージュは難民化した孤軍を説明している。

台湾に住む人々は、まさに血汗（タイでの勦共）を流すことにより1978年以降に北タイでの居住権を獲得し始めた「難胞」（難民同胞）の存在を、柏楊のルポルタージュを読んで知った。同書がきっかけになって、『異域』以降の泰緬孤軍の惨状が台湾へ伝わり、そして「送炭到泰北」（北タイへ温もりを送ろう）⁴⁴と呼びかける支援活動が台湾で始まり、多くの人が参加するブームになる⁴⁵。

中国大陸災胞救済総会（救総）が「送炭到泰北」を主導し、泰北難民村工作団（工作団、1982-2004）を組織して北タイへ派遣し支援活動を行った⁴⁶。救総の工作団は、医療支援、教育支援、インフラ建設、農業支援、戦傷救助、技術支援、食糧支援、衣料支援、住宅支援、來台支援などを主な支援活動にしていた。工作団の支援活動は、例えば台湾側では外交部、国防部、僑務委員会、教育部、行政院退役軍人輔導委員会などと、タイ側ではタイ王室プロジェクト（1969年開始、**Royal Project**）⁴⁷と連携して展開していた。こうした組織は、実は中華民国政府の正式かつ恒常的な支援が無かった1960-70年代の空白の20年間にあっても、水面下で断片的に北タイの同胞を援助してきた組織なのであった。

救総の他にも、慈善団体、宗教団体（例：カトリックの台湾明愛会〔**Caritas Taiwan**〕）が「送炭到泰北」を呼び掛けた。チャリティー・イベントが多数開催され、とりわけ1982年と1984年に大規模なものがあり、「送炭到泰北」は（台湾規模の）全国を席捲するイベントとなった [沈克勤2002: 332-339]。

しかし、「送炭到泰北」が台湾で一大ブームになると、タイは困惑した。自国領に蟠踞する他国の軍隊へ、その母国が支援するからである。そして1984年、タイは北タイの華人難民村に対して本格的なタイ化政策を開始するに至った [沈克勤2002: 338-339]。そのため台湾側は「送炭到泰北」の熱気を鎮静化せざるを得ず、救総はその後、1986年から1994年までに、「泰北難民村就地救済工作五年計画」（北タイ難民村現地救済活動五年計画）および「後続支援三年計画」

を地道に展開することになる。

1990年には、『異域』が映画化される。朱延平監督『異域』(英題:A Home Too Far)である⁴⁸。この映画は台湾で1990年の興行成績が全タイトル104本中の14位だった⁴⁹。今や北タイで難民となり、台湾の社会問題となった人々のきっかけを説明するものとして、この映画は大きな役割を果たしており、このことは「アジアの孤児」というと、この映画以降、現在に至るまで、台湾ではたいいていの人々が映画の主題歌であった「亜細亜的孤児」を想起するのだという現象からも理解できよう。呉濁流『アジアの孤児』を想起するのは一部の知識人だけであると言っても、過言ではない⁵⁰。

要するに、1980年代台湾の言論空間において、泰緬孤軍は革命の先鋒というかつてのイメージを失い、難民というイメージをまとうようになった。ここでの難民イメージの内容は、中共の被害者、タイ政府(あるいはタイ内戦)の被害者、さらには中華民国政府の被害者として解釈しうる。また孤軍の軍事拠点が北タイにあったため、台湾では泰緬孤軍を泰北難胞(北タイの難民同胞)と呼び、支援すべき対象に位置付けた。

(2) 中華民国の北タイ難民救援

実は、台湾社会一般には知られていなかったものの、柏楊のルポルタージュに先んじ、中華民国政府が内部で北タイ支援を模索していた。そういう背景の下で、期せずして登場した柏楊のルポルタージュ(1982)が直接的な契機にもなって、「送炭到泰北」(北タイへ温もりを送ろう)と呼びかける支援活動が1980年代の台湾の言論空間で広まったとも言える。ここでは、北タイ難民を事例にして、1980年代台湾における中華民国という国家にとっての難民の意味を分析し、それが共産主義の被害者にはほぼ限定されていたことを指摘しよう。

既述の通り、1961年の第二次撤退以降、中華民国政府が台湾から泰緬孤軍を正式にかつ継続的に支援しておらず、孤軍はひどい惨状にあった。ただ、軍や特務による秘密裏の諜報活動は続いていた。主に中華民国政府の国防部情報局の1920区部隊と、国民党の中央党部第二組の雲南省特派員弁公処(雲南処)とが、北タイを拠点にして滇緬泰をまたぎ、大陸反攻に備えての情報収集を展開していた⁵¹[覃怡輝2009:327-383]。この諜報活動の故に、中華民国が泰北孤軍の惨状を知らないはずはなく、無支援のままで放置するわけにはいかなかったのだろう。

行政院退役軍人輔導委员会主任の趙聚鈺がタイ王室プロジェクトの招きでたびたびタイを訪れた際に、北タイで孤軍の段希文と接触することがあり、1980年春に台北で蔣経国に北タイ支援を上申した。すると蔣経国は、国際争議の発生を避けて支援を展開するために、北タイの軍隊を中国大陸からの難民と看做すべきであると述べ、それ故に孤軍を退役軍人として政府機関の行政院退役軍人輔導委員会が支援するのではなく、難民として中国大陸災胞救済総会(救総)が救援するよう指示を出す[沈克勤2002:340-343]。

台湾の政府内で泰緬孤軍のイメージを、救援すべき難民に改めたのは、近代主権国家の論理

と中華民国-タイ関係とが背景にあった。まず、そもそもタイは主権国家として、自国領に蟠踞する他国の軍隊に対しその母国が直接支援するのを、まさか積極的に認めるはずはない。しかも、中華民国とタイは1975年に国交断絶している。しかし1969年以來のタイ王室プロジェクトへの協力が大いに評価され、断交後もタイ側（特に王室）から引き続き協力を請われ、中華民国はタイとの関係を何とか維持している状態だった [沈克勤2002: 1-4]。

中国大陸災胞救済総会（救総）では理事長の谷正綱が尽力して、国民党や政府関係機関（僑務委員会など）に北タイ支援への協力を呼びかけており、1980年11月に「改善泰北難民村難胞生活、発展難民子弟教育計画」（北タイ難民村の難民同胞の生活を改善し、難民子弟の教育を進展させる計画）を立ち上げる [沈克勤2002: 342-343]。こうして米華断交（1979年元旦）の直後の国際的に孤立していた状況で、中華民国政府は救総を通じてほぼ20年ぶりに北タイ支援を再開したのである。

振り返れば中華民国は中央政府を台湾へ移転した後、中国大陸から脱出する人々を難民と看做し、香港を拠点に救援活動を展開していた⁵²。確かに中華民国の難民救助は、基本的に中国人や華僑が主な対象であった。というのも、同胞が共産主義の暴政に耐え切れず、難民となっても自由な中国を求め、台湾に拠る中華民国を祖国として目指す。このような物語を中華民国は宣揚して難民を受け入れることで、内外に向けて唯一合法の中国を自任しようとしたからだった。共産主義による被害者としての難民という脈絡の中で、北タイの孤軍も1980年代に難民として看做されたのである。

中華民国は、1980年代のタイにおいて3種類の難民救助活動を展開している。すなわち、中泰支援難民服務団（Thai-Chinese Refugee Service, 略称は中泰団, TCRS）⁵³、泰北難民村工作団（工作団）、泰北農技援助団（農技団。「農技」は農業技術の意）の3種である。中泰団と工作団は外国からタイ国内へ流入した難民の支援を目的にしていた。前者はインドシナ三国からのインドシナ難民とりわけ華人系難民を難民キャンプで、後者は雲南からの泰緬孤軍を北タイの難民村でそれぞれ支援する。中華民国政府にとって孤軍もインドシナ難民も共に共産主義の被害者としての難民なのだった。農技団はタイ王室プロジェクトに参加し、タイの貧農への支援を目的にしていた。農業支援という支援内容が重なるため、時に農技団は工作団に協力して、泰緬孤軍の難民村をも支援していた [陳鴻瑜1986]。中泰団が北タイ難民村を支援した事例はわずかにあり、例えば「栄民之家」（栄民とは退役軍人のこと、ここでは傷痍軍人を指す）の建設（1981）であった⁵⁴。

こうした中華民国の難民支援には、中華民国がタイとの固有の関係を継続する意図のほかにも、実は対外的に民主国家を自任し台湾統治の正当性を主張するという意図もあったと考えられる。特に米華断交以降、1980年代の中華民国は、国際的に孤立し、台湾内部からも異議申し立てがあり、台湾統治の正当性の確保が危うくなっていた。あくまで中国統治を想定した憲法を堅持し、しかもその憲法が戒厳令下で凍結状態にあり続け、常識的には民主国家とは言い難

かった。かかる背景があったからこそ、中華民国は1980年代のタイを舞台にする難民支援に二つの大きな意義を見出した。すなわち第1に、共産主義の迫害から避難する難民を救助するので、中華民国はたとえ国際的に孤立していても、国際社会とりわけ人権尊重を普遍理念に掲げる西側諸国に向け、自らの存在を自由民主主義国家（西側陣営）として宣伝できる。そもそも冷戦期の難民支援には、東西イデオロギー対立という政治的要因が背後にあったからである⁵⁵。そして第2に、中華民国が人道に基づく難民救援活動を海外で行っているから、台湾での統治をも人権尊重の民主的な統治であると国際社会に思わせるきっかけになる。

要するに、1980年代の中華民国政府にとって、難民とは共産主義の創り出した被害者なのである。泰緬孤軍もこの文脈で理解された。柏楊のルポルタージュが伝え、「送炭到泰北」の参加者が想起したところの孤軍の難民イメージは、必ずしも共産主義の被害者のみにとどまらず、タイ内戦の創り出した被害者であり、ひいては中華民国政府の創り出した被害者でもあったはずである。しかし、中華民国政府は支援すべき空間を北タイに限り、難民の意味を共産主義の被害者に限定して当時の国是である反共政策に合わせた。そうすることにより、泰緬孤軍を「我々」（中華民国という国民国家の主体）が助けるべき難胞（難民の同胞）として位置付け、支援活動を展開したのである。

四、タイにおいて支援すべき難民華僑：1990年代～現在のイメージ

1990年代に入ると、台湾の言論空間では泰緬孤軍を「難僑」（難民華僑）というイメージで認識するようになる。ここでの難僑とは、「我々」（中華民国という国民国家の主体）がタイにおいて支援すべき同胞であった。従来は難民となった原因を共産主義に強く求めていたものの、1990年代以降になると原因がぼやけてくる。こうした難僑イメージを確認するため、本節では、救済の展開した3つの支援活動を時系列的に考察し、台湾の言論空間において孤軍のイメージが難民から華僑⁵⁶へ次第に変わってゆくことを指摘しよう⁵⁷。

1990年代に入り救済が展開した支援活動の1つ目は、1990年の「戦士授田」をめぐる問題の解決である。「戦士授田」をめぐる問題とは、「戦士授田憑摺」（戦士が田畑を授かるための証書）の所持者への補償金支払いの期限を、かつて泰緬孤軍だった人々のために延長できるかどうか、という問題である。かつて1950年代に国民党政府（中華民国政府）は、中国大陸奪還後の土地分与の約束を掲げ、国民党軍兵士の士気向上を図った。その際の証書が「戦士授田憑摺」である。しかし、1990年の時点で大陸奪還に近い将来の実現可能性が極めて低い。何より、かつての国民党軍兵士がもう高齢になっていた。そのため、中華民国政府は代替案として補償金の支払いを決める。支払いの期限は2年間であった。

ただ、2年という短時間では海外の元兵士、特に北タイのような交通や連絡が不便な場所に住む元兵士へは、通達があまねく届かずに支払い手続きが完了しない。この制度不備に対

し、台湾の国会議員が陳情を重ねた⁵⁸。結果、支払い期限が2000年まで延びて、かつての泰緬孤軍の一員であり、そのうち証書を保持する2818人が補償金を受け取れた〔中華救助總會編、2010：98-99〕。

「戦士授田」の問題を解決する際に、救総が大きな役割を果たし、この問題解決は基本的には救総の泰北難民村工作団（1980年代の「送炭到泰北」を主導した組織）が取り組む重要な任務になった。つまりこの問題は、1980年代の難民支援の延長線上に位置付けられており、難民イメージで旧孤軍がなおも理解されていたと言える。

元兵士への補償金の支払いは、中華民国政府が自らの過去を清算し、北タイ支援を見直すことをも意味していた。中華民国が1990年代に「本土化」（台湾化）を強く推し進めると、これまでのように反共を掲げて中国大陆の奪還を目指すことに、もはや積極的でなくなった。代わって、台湾らしさを重視し始める。こうした背景の下で、「戦士授田憑拠」の補償金が支払われ、中国大陆奪還のために北タイで留置されたかつての兵士に対しても、事実上の退職金が支払われたと言える。

こうした政府の変容は、救総の在り方に影響する。1990年代には台湾の政治的民主化に伴い、多くの公的機関が再編され、民営化された。救総は、戒厳令が敷かれ、特定の政党（国民党）が国家に優先する国家体制の下で生まれた政府外郭団体である。まさに旧時代の申し子とでもいうべき存在の故に、様々な構造改革が迫られた⁵⁹。そして中華民国の本土化に伴い、政府による北タイ支援活動は大幅に縮小し、支援内容は二重に「本土化」（土着化、現地化）する。一つは（次に述べる）旧泰緬孤軍の関係者がタイ化するための支援であり、いま一つは（次節で考察する）支援活動の舞台の台湾化である。

救総が展開した支援活動の2つ目は、旧泰緬孤軍の関係者がタイに土着（定着）するための支援である。1997年に中華民国政府は自らの台湾化に伴い、北タイ支援を遂に予算から外す。北タイ支援は民間にゆだねられることになった⁶⁰。これを受けて、救総は3700万台湾ドル強を自弁して新たに「泰北難民村三年輔導計画」を展開した〔葛雨琴2005：272-279〕。救総の泰北難民村工作団は、1997-1999年に「泰北茅屋改建磚瓦房」（北タイの茅葺をレンガ造りに建て替える）という事業を起こす。1997年6月に「送愛心到泰北」（北タイへ愛を送ろう）を標語にして、チャリティー・コンサートを開き、三千戸をレンガ造りに建て替え、これを記念してメーサロンに「泰北難胞茅屋改建磚瓦房落成碑」（碑文は中国語とタイ語で表記）を立てた。その後、泰北難民村工作団はメーサロンに泰北義民文史館（2001年着工、2004年竣工）⁶¹を建設して、その任務を終える。

ここでも旧孤軍は難民イメージで理解されている。これは救総のプロジェクト名や組織名（つまり泰北難民村工作団）に端的に表れている。ただし、かつて1980年代の難民イメージが難民となった原因を共産主義に強く求めていたのに対し、1990年代以降になると原因は明示されていない。「泰北難胞茅屋改建磚瓦房落成碑記」（1999年10月）⁶²や「泰北義民文史館落成碑」

(2003年2月21日)⁶³では、難民となった原因よりも、支援の手を差し伸べたタイ王室、タイ政府、中華民国政府、救総への感謝が明記されている。これは、タイ政府による内戦の終結宣言(1984)で孤軍が武装解除され、中華民国政府による国共内戦の終結宣言(1991)で反共よりも台湾化が重要になった結果、旧孤軍はタイ国内の剿共のためでなく、中国大陸奪還のためでなく、自らのために北タイに土着して生きていかなければならなくなったからである。もはや共産主義の被害者という難民イメージが効力を失ったのだった。

ここで併せて注目したいのが、メーサロンに建設された泰北義民文史館の名称である。この名称は、孤軍を義民というふうイメージしたものである。そもそも義胞は、他者がある集団を同胞だとみなして名づけた概念である。そこで義胞ではなく、義民と位置付けたところに、孤軍を自任する人々の主体性が表れていると考えられよう。要するに、義胞から難民を経て華僑というふうそれぞれのイメージが、単に二転三転しているのではない。こうした変遷の大きな流れはあるものの、新たなイメージは従前のイメージを取り込みながら、時と場合にに応じて、従来のイメージも新たな姿で登場しているのである。

救総が展開した支援活動の3つ目は、旧泰緬孤軍の関係者がタイ華僑としてタイで活躍するための支援である。こうした支援活動が出現したのは、中華民国の本土化や救総の財政困難に加え、泰緬孤軍の第一世代が鬼籍に入り始め、「孤軍後裔」(孤軍の子孫)と呼ばれる次の世代が活躍するようになったからである。

救総は2002年から数年間にわたり、構造改革や大規模なリストラを進め、台湾を代表するNPOへの衣替えを図る〔頼威志2009〕。救総の北タイ支援は、2000年代中ごろから新たな段階へ入った。支援は小規模なものになり、かつての面影はない。従来からの道路、水道、電気、学校の設置や建設というハード面の支援を終了し、代わって学生貸与奨学金や無償の教育奨励金といった教育支援、そして商品作物(烏龍茶、野菜、果物)に関する農業技術支援というソフト面の支援に重点を置くようになる。

具体的には、救総は民間からの支持を募り、2001年に「泰北同胞子女奨助学金」、2009年に「泰北地区就讀大学華裔青年助学贷款」(北タイ地区でタイ国内の大学へ進学する華人青年のための貸与奨学金)、2010年に「泰北地区華文学校専任華文教師教学津貼補助」(北タイ地区中国語学校の中国語専任教師の給与への補助)の関連業務を始めている〔中華救助総会2010:103~109〕。こうした業務の名称からもわかるように、救総は、孤軍後裔を同胞であり、華僑であると看做している。次世代の登場は、台湾の言論空間が旧泰緬孤軍の関係者を難民としてではなく、新たに華僑として理解するきっかけになった。

筆者の聞くとところによれば、その実、北タイ出身者が今や高度に産業化し消費社会化した台湾へ来たとしても、激しい競争社会の中で生き抜くのは相当困難だろう。台湾へ来るよりも、21世紀に入り中国経済が目覚ましく抬頭した今だからこそ、中国語運用能力を武器にしてタイ国内で生きてゆく方が現実的にちがいない。近年のタイ化支援の背後には、救総のこのような

考え方があるのだという。

もちろん、救総をはじめとするこうした台湾側の処置に対して、北タイ華人村の間に不満や動揺がないわけではない。そもそも中国人の子女としてタイで生まれ育った彼らには中国人アイデンティティはあっても、台湾そのものへの愛着などは皆無である。こうした感覚は、かつての雲南反共救国軍の一定数の将兵が1953年と1961年に台湾へ撤退するのを拒んだ理由と同じであり、すなわち、どこにあるかすらもわからないという台湾認識と雲南に地続きであるという泰緬認識とが背景になっている⁶⁴。筆者の臨地調査に基づくならば、北タイ華人村では、住民はタイ人としてタイで生きてゆくことが一般的な雰囲気になっている。しかし、李登輝が台湾政治を本土化路線へ動かして以来、2000年の総統選挙⁶⁵で台湾色の強い陳水扁（民進党）の勝利というニュースが入った時には、北タイ華人村は祖国としての中華民国に失望し、逆に2008年の馬英九（国民党）の勝利というニュースには喜んだという。台湾の言論空間と同様に、北タイ華人村も自らのアイデンティティに関して揺れているのである⁶⁶。

要するに、1990年代から現在に至るまでの台湾の言論空間において、旧泰緬孤軍は難民華僑というイメージを帯びている。特筆すべきは2点あり、一つは難民となった原因を明示しなくなった。これは、台湾の言論空間が反共をもはや重視しなくなったことと関係がある。いま一つは、難民華僑イメージは時の流れとともに、難民から華僑へ重点が移っている。これは台湾からの支援の対象が、旧泰緬孤軍の元兵士から孤軍後裔と呼ばれる次世代へ移ったからだと言える。つまり、台湾の言論空間では、旧孤軍（およびその子孫）を北タイの華僑であると見做し、北タイに根付いて生活するものだと考えるようになった。しかしながら次節で後述する通り、北タイから台湾を目指す人の流れは尚も存在し、台湾において社会問題となって今に至っている。

五、台湾において支援すべき難民華僑：1990年代～現在のイメージ

前節で述べたように、1990年代に入ると、台湾の言論空間では旧泰緬孤軍を「難僑」（難民華僑）というイメージで認識するようになった。ここでの難僑には、タイにおいて支援すべき同胞という既述の意味のほか、台湾において支援すべき同胞という意味もあった。難僑イメージが二つあるのは、台湾からの北タイ支援の内容が二重に「本土化」（現地化）し、一つは泰緬孤軍がタイ化するための支援となり、いま一つは支援活動の舞台を台湾化するという背景があったからである。こうした難僑イメージを確認するため、本節では、タイ（あるいはビルマ）からの難民華僑というイメージを台湾の言論空間に定着させた国籍取得問題を取り上げる。そして台湾の言論空間において、「孤軍後裔」（孤軍の子孫）が祖国の支持者であると看做され「我々」（国民国家的な主体）の構成員に位置付けられながらも、彼らの存在には常に違和感がまとわりついていることに、注目したい。

1990年代から現在までに台湾で泰緬孤軍が話題になったのは、大きく二回である。一度目は(前節で考察した)1990年の「戦士授田」をめぐる問題であり、二度目は1995年中頃から現在まで続く「泰緬地区華裔難民」の国籍をめぐる問題である。「泰緬地区華裔難民」の国籍をめぐる問題とは、台湾在住の泰緬孤軍の子孫たちが無国籍であると看做され、不法滞在を理由に逮捕、拘束されてしまう問題である。無国籍の故に国外強制退去もできないという⁶⁷。同じく1990年代の台湾で出現した「戦士授田」をめぐる問題に比べて、「泰緬地区華裔難民」の国籍をめぐる問題は台湾社会においてインパクトが大きく、今なお未解決である。本節では、1990年代台湾で中華民国が土着化するに伴って再整備された国籍制度を概観した上で、泰緬帰僑(タイ・ビルマから帰国した華僑)に関する国籍取得問題が台湾で出現し、今なお未解決の社会問題になっている様子を考察しよう。

さて、長らく北タイの華人村では、子女を(中華民国の)公費で台湾の高校や大学へ進学させることが大きな理想になり、公費獲得のために学生は成績を競ってきたのだという。なぜなら、子女が台湾にて中華民国国籍を取得することで、家族を台湾へ呼び寄せる。そして、一家はタイでタイ国籍や在泰外国人資格を取得できずに難民として過ごす不自由な生活から、脱却できる。このような成功譚を想定したからだった⁶⁸。

従来、学生は中華民国教育部の発行する入学許可証と駐泰国遠東商務処⁶⁹の発行する入国ビザ(入台簽證)を持ち、タイを出国し台湾へ入国すれば、入国後一週間以内に戸籍を作り、国民身分証を受領し、つまり中華民国国籍を取得できた。ただし多くの学生は北タイに生まれ育ったものの、タイ国籍を持たず、タイ国内での移動およびタイ国出国が不可能である⁷⁰。そこで、タイ-中華民国の両国は法の網の目をくぐる方法を用意した。つまり、この学生たちは(タイの)身分証を持たず不法滞在であるから、タイから強制退去させられるべきだ、と陳茂修(1981年考柯・考牙戦役などのタイ共産党剿滅事業における勲功者、タイ国籍保持者)が述べて、台湾行きの航空券を持たせた学生をタイ国の関係部署へ突き出すのだ。こうして学生は台湾へ向かったのである。

しかし、1985年に事態が変容する。タイでは、タイ国籍保有者および在タイ居留証を保有する外国人のみが、出入国の対象者となった⁷¹。中華民国ではこれに対応し、僑務委員会がタイ国籍保有者のみを華僑学生として認定し、台湾の大学への入学対象者とする。そして北タイの学生は台湾へ渡るために、偽造パスポートを用意するようになった。すると、こうした学生は台湾へ入国後、以下の法律に抵触してしまい、不法滞在を理由に、台湾で逮捕、拘束される。

中華民国内政部「国人入境短期停留長期居留及戸籍登記作業要点」(国民の入国に際しての短期停留、長期居留および戸籍登記に関する作業の要点。1991年実施-1999年停止)

- ・第七条「台湾地区における無戸籍の人民が台湾地区での長期居留を申請する際、左に挙げる事情のある者は許可されない。」
- ・第四項「偽造、変造の証書あるいは身分の盗用により、申請あるいは入国した者。」

同時にタイの国内法では、タイ国籍未保有者の偽造パスポートによるタイ出国が理由となり、彼らはタイへの再入国さえも不可能になる。

こうした状況に対して、劉小華（女性、元は軍に勤務）という台湾の一市民が疑念を抱く。かつて反共のために北タイに残留した人々の子孫が、なぜ国籍取得できないのか。中華民国はなぜ彼らを華僑として認可し国籍を付与しないのか。しかも彼らは僑務委員会の教科書⁷²で学んでいるのに、と。彼女は1994年に「泰北孤軍後裔權益促進會籌備處」（後に「泰緬地区華裔難民權益促進會」へ改称）を立ち上げ、「孤軍後裔」（孤軍の子孫）の歴史的背景を踏まえた上で、人道に訴え、中華民国憲法が保障する基本的人権を在台的孤軍後裔にも適用するよう、台湾社会へ問題提起した⁷³。他方、中華民国政府が孤軍後裔の国籍取得を拒否する理由は、国籍申請者が本当に孤軍後裔であるのか否かを判別できないからであった⁷⁴。実のところ、孤軍後裔を騙って中華民国国籍を取得しようとする、タイやビルマからの不法滞在者が存在したからである。私たちはここで孤軍後裔が台湾で直面した法律、管轄部署、支援組織の名称をながめてみるなら、台湾の言論空間では朝野挙げて孤軍後裔を基本的に同胞であるという前提に立ち、華僑や難民といったイメージで認識していることが理解できる。

劉小華等の活動の主要目的は、在台的孤軍後裔の權益（国籍をはじめとする基本的人権）の確保である。監察院⁷⁵での調査や陳情を経て、1994年から現在までに3回の大きな成果があった。書籍〔泰北孤軍後裔1995〕、〔江元慶2001〕も公刊して問題提起している。

第1の成果として、1995年10月1日に僑務委員会が「中華民國七十四年至八十年間回國升學之泰北僑生身分處理要點」（1985年から1991年までに帰国し進学した北タイ華僑身分に関する処理の要點）を交付する〔柏楊・汪詠黛2007：189〕。国籍申請をした148人のうち116人が、国籍を取得できた。

一部に国籍を取得できなかった学生がいるのは、1985年から1991年までの來台学生のみが対象になったためである。そのため、1991年より後に來台した学生の国籍確保について、劉小華は引き続き訴える。2000年初めに廖健男（監察委員）、李漢河（監察院調查處調查官）、張富美（監察委員）の協力を得て、舞台を監察院に移し、2001年2月1日に148人全員が国籍を取得できた。これが第2の成果である。

しかしながら台湾で生活する泰北僑生（北タイからの華僑学生）の全員が中華民国の国籍を取得できたわけでない。2008年7月3日（台湾海峡兩岸直行空路の約60年ぶりの再開前日）、ビルマ華僑の学生が抗議デモを台北市内で実施した。彼らが「^{あじあのこじ}亜細亞的孤兒」（1990年朱延平監督の映画『異域』の主題歌）を歌って抗議する姿は、テレビで大きく報道された。映画『異域』と主題歌「アジアの孤兒」のために、近年の台湾の言論空間では「泰緬孤軍＝異域＝アジアの孤兒」というイメージが形成されて今に至っている。つまり、孤軍後裔と呼ばれる人々は、台湾（中華民国）が国際政治上の「アジアの孤兒」であることになぞらえて、自らを「中華民国の孤兒」と位置づけ、不合理の解消を訴えたのである。台湾の言論空間には、自らの国

際的な不遇に鑑み、自らが「異域」として半ば切り捨てつつあった孤軍後裔の不遇を放置できないという気運が高まった。

2009年6月8日、移民署(正式名称は「内政部入出国および移民署」)は、「滞台泰国緬甸地区国軍後裔申請居留或定居許可弁法」を正式に発布し、目下のところ学生の身分で台湾に滞在する泰緬孤軍の子孫が、無戸籍国民の身分で合法的に台湾での居留あるいは定住することを許可する、と発表した⁷⁶。劉小華等「泰緬地区華裔難民權益促進会」の活動の第3の成果であった。この際、移民署は法律の対象者を、「入出国及移民法」公布日の1999年5月21日から2008年12月31日までの來台者としている⁷⁷。「泰緬地区華裔難民」や「泰国緬甸地区国軍後裔」という単語から判明するように、タイとビルマ、さらに華僑と難民が混在している。

2011年の中華民国百年の元旦には、総統府前の国旗掲揚式典に泰緬孤軍の子孫が登場したものの、登壇した孤軍後裔は、数日後に不法滞在が発覚し拘留された。(この件については、本稿の冒頭で言及した。)泰緬孤軍は今なお台湾における社会問題なのである。国籍問題は今なお続いている。そもそも台湾に滞在中の孤軍後裔の人口はどのくらいなのか、なぜいつまでも増加するのか、このあたりは審らかでない。

最後に、難民や華僑ではなく、新移民というイメージでかつての泰緬孤軍が語られていることに言及しよう。ちょうど2000年ごろから「新台湾之子」(新しい台湾の子)と呼ばれる人々が台湾の社会問題として顕著になっている⁷⁸。農村部の花嫁、都市部の家事労働、工場労働者の不足を補うべく、台湾では東南アジアからの労働力を受け入れてきた。こうした人々は「新移民」(あるいは新住民)と呼ばれ、人口は2010年頃には40万人を超え、これに(外国籍でなく大陸籍である)中国大陸からの花嫁を加えると、台湾の住民を構成する四大エスニック・グループの一つの原住民50万人弱を恐らく凌駕している⁷⁹。

台湾在住の孤軍後裔を新移民の一部として見做す理解が、わずかながら存在する。筆者の仄聞する限りでは、例えば、「覃怡輝新書出版記念座談会：中央研究院出版社『金三角国軍血涙史』(2009年9月1日)のプログラムにも新移民の文字が記されていた⁸⁰。また一昨年放映されたドキュメンタリー番組「記録観点303」(2012年5月29日)⁸¹は、新移民という概念の中で泰緬地域の華人を扱っていた。

要するに、本節の議論を整理すると、1990年代から現在までの台湾の言論空間における泰緬孤軍のイメージについて、次の2点が言えよう。第1に、泰緬孤軍の関係者は、タイやビルマから台湾へ来た華僑や難民として理解される。台湾において支援すべき同胞であった。第2に、中華民国の台湾化は、泰緬孤軍に関係する支援活動をも台湾化した。つまり、支援活動の内容が「台湾における泰緬孤軍」へ集中するようになったのである。これは、孤軍後裔が現代台湾の社会問題として大きく登場したことと関係していた。孤軍後裔の国籍取得問題をめぐり、孤軍後裔を「我々」(国民国家的な主体)の構成員に位置付けるべきか否か、台湾の言論空間は今に至るまで悩み揺れているのである。

おわりに

台湾は、現代史の中で、政治の重心を中国から台湾へ移してゆく。この過程は本土化（台湾化、土着化、現地化）と呼ばれる。1990年代以降に本土化が顕著になると、かつて持っていた中国規模の枠組みは台湾規模のものへ変容した。自己像（「我々」なるもの）も例外でなく、中国人から台湾人へ変わった。本土化する過程で、中国大陸の人々がかつての同胞から今や他者となり、華僑は中華民国籍を持つ限りとりあえずは同胞とみなされている。こうした大陸の人々や華僑の地位については、法的に根拠づけられた。しかしながら、台湾化に伴い、それに対応できず、今なお法的にあいまいな人々が存在する。泰緬孤軍（およびその末裔）と呼ばれる人々である。同胞ならば国籍が付与されてしかるべきものであるが、スムーズに付与されていない。台湾の外に住んでいるから、華僑として認定されるのかといえば、そうもいかない。そこで本稿は、台湾から泰緬孤軍に与えられたイメージを特定し、その変遷をたどることで、泰緬孤軍が本土化後の台湾で自己とも他者とも言い難い奇妙な状態に位置づけられていることを示した。

泰緬孤軍が担う幾つかのイメージは、現代台湾の言論空間において以下のように出現し変容したと整理できよう。1950年代の滇緬国境地帯の国軍は、1960年代初頭に泰緬孤軍と呼ばれ始め、義胞イメージを帯び、1980年代には共産主義の被害者としての難胞イメージをまとった。タイと台湾で内戦が過去のものになり、とりわけ1990年代以降、台湾の言論空間が朝野挙げて本土化（台湾化）を目指すようになると、台湾から孤軍への支援が二重に「本土化」した。すなわち、孤軍の子孫を難民華僑とイメージし、一方で彼らがタイで生きてゆけるように、いま一方で台湾で不当な扱いを受けないように、それぞれ支援すべきだと考えるようになったのである。

時系列的に変化する泰緬孤軍イメージは、現代台湾の言論空間が重視する理念が、反共から台湾らしさへ転換したことと関係している。そして、この理念の転換は、現代台湾が（事実上の）国民国家として持つ自己意識（ナショナル・アイデンティティ）の中国的なものから台湾的なものへの転換でもあった。つまり、泰緬孤軍は実体としては北タイにもはや存在しないにもかかわらず、現代台湾では歴史的に形成された概念として今なお確かに存在し、台湾の新しいナショナル・アイデンティティにとっての難題になっている。

このように現代台湾の言論空間では、泰緬孤軍をあくまでも同胞として看做してきた。しかし近年に至って、泰緬孤軍を「我々」（国民国家的な構成員）の一部に位置付けることに対して違和感がただよい、それは次第に増幅する傾向を持っている。例えば孤軍後裔の国籍取得問題は今なおスムーズに解決していない。実のところ違和感の所在は、1990年代以降の「我々」が「台湾的なもの」（本土的なもの）を重要な理念として追求する際に、泰緬孤軍の関係者と共に運命共同体を作れないからである。「我々」はかつて反共が声高に叫ばれ時代に泰緬孤軍

をもてはやしたものの、今や台湾らしさが重視される時代になると、「在台湾」(台湾で)の歴史的経験に結びつかない泰緬孤軍を、「我々」の一部に位置付けることに、違和感を感じ途惑ってしまう。

翻って、泰緬孤軍の惨状を生み出し、孤軍を難民にした原因は何だったのか。共産主義(中共、タイ共、そして共産主義一般)だけではなく、実は中華民国政府にも原因があった。そして台湾の言論空間が長らく権威主義体制下にあり、基本的に政府の施策を黙許せざるを得なかったとはいえ、時に朝野挙げて多くの人々が政府の施策の範囲内で難民支援を声高に叫んだという過去を持っている。いわば「移行期における正義」の問題⁸²が、政府に都合の良い難民支援活動に参加した現代台湾の人々全般に、問われているのだ。現代台湾のナショナル・アイデンティティは、旧時代に作った様々な傷跡(「国瘍」)を、新しい時代になって慰撫し、時に謝罪してきた。ただ、泰緬孤軍という存在に対して、ナショナルな対応は今なお果たされておらず、今後の展開が待たれている。

本土化を経て、台湾は中国規模の枠組み(とりわけ自己像)をどう処理すべきか。歴史的に見れば、台湾では孤軍に対し、朝野挙げて都合良く同胞とみなし、時に断絶しつつも基本的には長らく支援してきた過去がある。そのため今更彼らの存在を忘却できないのである。つまり、孤軍イメージには「捨てきれない自己」という要素が含まれており、ここにも現在の台湾において本土化が徹底しない小さな一因があると言えよう。

[謝辞 / Acknowledgment]

関係各位からのご指導とご協力があり、臨地調査を踏まえた研究が実現できました。中華救助総会、泰国世界日報社、清邁雲南会館、清萊雲南会館、興華学校、台北市雲南同郷会の関係者各位、特に葛雨琴、張正中、林英貞、丁昱晴、多守仁、朱成亮、黄根和、曹克謙、毛国文、高菁、楊成孝、李良弼、李守寰、周開貴、撒光漢、山地幸、胡春恵の各位に厚くお礼申し上げます。また本研究は科研費〔特別研究員奨励費〕(11J01368)の助成を受けました。This work was supported by (JSPS) KAKENHI [Grant-in-Aid for JSPS Fellows] (11J01368).

引用文献リスト

中国語

- 柏楊. 1982. 『金三角, 辺区, 荒城』台北: 時報文化.
- 柏楊. 1988. 『金三角, 荒城』柏楊書報導文学2 台北: 躍昇文化.
- 柏楊(企画), 汪詠黛(執筆). 2007. 『重返異域』台北: 時報出版.
- 陳鴻瑜. 1986. 「中華民国對泰境難民的援助: 兼論泰境難民的國際背景」『問題與研究』(台北: 政治大学國際關係研究中心) 26 (3): 1-20.
- 陳鴻瑜編. 2000. 『中華民国之僑務政策』中華民国海外華人研究学会叢書5 台北: 中華民国海外華

人研究学会.

陳茂修 (口述), 田景燦 (整理). 2008. 『九一話人生: 陳茂修自伝』 タイ国某所: 私家版?.

陳文政. 2010. 「泰北中国「結」: 從泰北華人学子的中国求学路談起」 修士論文 台北: 国立台湾大学新聞研究所. および同名の DVD (2011. 台中: 充電趣電影文化).

鄧克保. 1961?. 『血戰異域十一年』 台北: 自立晚報出版社.

鄧克保. 1961. 『異域』 台北: 平原出版社.

再版1977 (台北: 星光出版社).

柏楊. 1988. 『異域』 柏楊書報導文学 1 台北: 躍昇文化.

Bo Yang. 1996. *The Alien Realm*, translated by Janice J. Yu. London: Janus Publishing.

柏楊. 2000. 『異域』 柏楊精選集26 台北: 遠流.

柏楊. 2012. 『異域: 中国共産党に挑んだ男たちの物語』 出口一幸訳, 第三書館.

鄧賢. 2000. 『流浪金三角』 北京: 人民文学出版社.

鄧賢. 2005. 『ゴールデン・トライアングル秘史: アヘン王国50年の興亡』 増田政広訳, 日本放送出版協会.

葛雨琴. 2005. 「全心全意關懷社会的人民团体: 中華救助總會」 『社区發展季刊』 (台北: 内政部社会司) 109: 272-279.

龔承業. 2007. 『異域三千里: 泰北廿載救助情』 台北: 中華救助總會.

黄根和・林信雄・孫国楠 (総企画). 2005. 『泰華之光: 泰国世界日報創刊50週年特輯』 Bangkok: 世界日報.

尹光保 (等著)・葉瑞其 (編). 2011. 『從異域到新故郷: 清境社区五十年歷史專輯』 南投県仁愛故郷: 投県清境社区發展協会. 清境社区發展協会の公式サイト (<http://community.cja.org.tw/50years.html>) に「清境社区50年歷史專輯」として掲載されており, ダウンロード可.

江元慶. 2001. 『滿星暈悲歌』 台北: 新新聞文化出版. 再版2004 (台北: 監察院).

賴威志. 2009. 「老店創新象?: 中華救助總會轉型之導因與現況分析」 修士論文 台北: 世新大学行政管理学研究所.

雷雨田. 2000?. 「從戰乱到昇平看泰北蛻變」 中華救助總會編 『救総五十年金慶特刊』 台北: 編者, 250-263.

黎活仁・龔鵬程・李瑞騰・劉漢初・黄耀・梁敏兒・鄭振偉編. 2000. 『柏楊的思想與文学: 「柏楊思想與文学国際學術研討会」 論文集』 台北: 遠流.

李明錫. 2005. 「『国雷演習』 接運來台『反共義民』 安置社区之研究」 修士論文 高雄: 樹德科技大学建築與古蹟維護研究所.

林芝諺. 2011. 『自由的代価: 中華民國與香港調景嶺難民營 (1950-1961)』 台北: 国史館.

覃怡輝. 2009. 『金三角国軍血涙史 1950-1981』 台北: 中央研究院, 聯經出版. 紙幅の制限があり, 同書に収録できなかった写真や年表が中央研究院の Website (<http://www.sinica.edu.tw/info/>)

publish/980904-9.htm) で公開されている。

- 仁愛郷清境社区發展協會. 2005. 『雲霧清境・文化手札』南投県：編者。
- 桑元元. 2010. 『『家』的認同與建構：博望新村人群經驗述説』修士論文 花蓮：慈濟大学人類發展研究所。
- 撒光漢. 2011. 『異域故事集』桃園県中壢市：著者。
- 撒光漢. 2009. 『異域照片集』桃園県中壢市：著者。
- 沈克勤. 2002. 『使泰二十年』台北：台湾学生書局。
- 石炳銘. 2008. 『異域行泰北情：泰北工作実録』台北：中華救助總會。
- 泰北孤軍後裔. 1995. 『孤軍後裔的吶喊：我們為什麼不能有身份証』台北：星光。
- 吳前進. 2003. 『国家關係中的華僑華人和華族』北京：新華出版社。
- 夏誠華. 2005. 『民国以来的僑務與僑教研究（一九一二—二〇〇四）』玄奘大学海外華人研究中心叢書第1種 新竹：玄奘大学海外華人研究中心。
- 楊瑪利, 楊艾俐等. 2004. 『新台湾之子：未來百年台湾競爭力』台北：天下雜誌出版。
- 楊瑞春. 2010. 『国特風雲：中国国民党大陸工作秘檔 1950-1990』永和：稻田出版。
- 張雯勤. 2002. 「從難民到移民的跨越：再論泰北前国民党雲南人遷移模式的轉變」『海華與東南亞研究』(台北：海華與東南亞研究雜誌社) 2 (1)：47-73。
- 中国大陸災胞救濟總會編. 1999. 『関愛與服務：泰北茅屋改建磚瓦房三千戸落成專輯』特刊台北：編者。
- 中華救助總會編. 2000?. 『救総五十年金慶特刊』台北：編者。
- 中華救助總會編. 2004. 『耕耘：救総五十四載工作紀実』台北：編者。
- 中華救助總會編. 2010. 『救総六十：中華救助總會成立60周年專輯』台北：編者。
- 卓遵宏(企画), 龔学貞(等口述), 張世瑛(主訪). 2002. 『不再流浪的孤軍：忠貞新村訪談録』新店：国史館。
- 『泰北義民文史館誌』Mae Salong：同館. 刊行年は同館竣工の2004年から筆者が同誌を購入する2008年までの時期のいずれか。
- 『雲南文献』台北：雲南旅台同郷会. 1971- 現在。
- 『中国時報』1977年11月3日(台北)「鄧克保『異域』重印校稿後記」. 柏楊[2000：189-191]に所収。
- 日本語**
- 石川誠人. 2008. 「アメリカの許容下での「大陸反攻」の追求：国府の雲南省反攻拠点化計画の構想と挫折」『日本台湾学会報』10：55-74。
- 片岡樹. 2004. 「領域国家形成の表と裏：冷戦期タイにおける中国国民党軍と山地民」『東南アジア研究』42(2)：188-207。
- 片岡樹. 2013. 「先住民か不法入国労働者か？：タイ山地民をめぐる議論が映し出す新たなタイ社会像」『東南アジア研究』50(2)：239-272。

- 加藤節, 宮島喬編. 1994. 『難民』 東京大学出版会.
- 木村自. 2010. 「雲南ムスリム移民が取り結ぶ社会関係と宗教実践の変容: 台湾への移住者を中心に」 塚田誠之編 『中国国境地域の移動と交流: 近現代中国の南と北』 人間文化叢書ユーラシアと日本: 交流と表象 有志舎, 177-205.
- 木村自. 2009. 「虐殺を逃れ, ミャンマーに生きる雲南ムスリムたち: 「班弄人」の歴史と経験」 堀池信夫編 『中国のイスラーム思想と文化』 アジア遊学129 勉誠出版, 160-175.
- 木村自. 2009. 「台湾回民のエスニシティと宗教: 中華民国の主体から台湾の移民へ」 庄司博史編 『移民とともに変わる地域と国家』 国立民族学博物館調査報告 *Senri Ethnological Reports*, No.83 国立民族学博物館.
- 久保忠行. 2009. 「タイの難民政策—ビルマ(ミャンマー) 難民への対応から」 『年報タイ研究』 (日本タイ学会) 9: 79-97.
- 小泉康一. 2005. 「第四章 振れるタイの難民政策: 一九七五—一九九〇年」 『国際強制移動の政治社会学』 勁草書房.
- 小山三郎. 2008. 「柏楊投獄事件に関する考察」 『台湾現代文学の考察: 現代作家と政治』 知泉書館, 131-164.
- 王柳蘭. 2011. 『越境を生きる雲南系ムスリム: 北タイにおける共生とネットワーク』 昭和堂.
- 新谷秀明. 2004. 「曾焯について: ある華人作家とその越境」 山田敬三編 『境外の文化』 汲古書院, 207-223.
- 戴国輝. 2011. 『客家・華僑・台湾・中国』 戴国輝著作選(1) みやび出版.
- 竹口美久. 2011. 「タイにおける外国人労働者受容の制度的変遷: 『半合法』的地位をめぐる諸問題」 博士予備(修士)論文 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科.
- 玉田芳史. 1999. 「タイの国籍法と住民統制: 中国人住民をめぐる」 村松岐夫編 『途上国の地方行政システムと開発』 平成9-10年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書, 73-99.
- 玉田芳史. 2006. 「タイにおける外国人の政治的権利」 河原祐馬・植村和秀編 『外国人参政権問題の国際比較』 昭和堂, 190-220.
- 玉田芳史. 2012. 「タイにおける『外国人』の統合」 河原祐馬編 『移民外国人の社会統合問題をめぐる地域間比較研究—「内包」と「排除」の議論を超えて』 平成21-23年度科学研究費補助金(基盤研究(B)一般) 研究成果報告書, 54-73.
- 田上智宣. 2010. 「第4章 新移民政策の形成と展開」 佐藤幸人編 『社会の求心力と遠心力』 台湾総合研究Ⅲ〔調査研究報告書〕アジア経済研究所, 51-63.
- 土佐弘之. 2004. 「移行期における正義(transitional justice)再考: 過去の人権侵害と復讐/赦し, 記憶/忘却の政治」 『社会科学研究』 55(5/6): 79-99.

欧文

Chang, Wen-Chin. 1999. "Beyond the Military: The Complex Migration and Resettlement of the KMT Yunnanese Chinese in Northern Thailand". Ph.D. dissertation, Department of Social and Cultural Anthropology, Catholic University of Leuven, Belgium.

Cline, Ray Steiner. 1989. *Chiang Ching-Kuo Remembered: the Man and His Political Legacy*. Washington, D.C.: United States Global Strategy Council, 1989.

克萊恩. 1990. 『我所知道的蔣經國』聯合報國際新聞中心訳, 台北市: 聯經出版.

Gibson, Richard M.; Chen, Wen H. 2011. *The Secret Army: Chiang Kai-shek and the Drug Warlords of the Golden Triangle*. Singapore: J. Wiley & Sons (Asia).

John Makeham, A-chin Hsiau (ed.). 2005. *Cultural, Ethnic, and Political Nationalism in Contemporary Taiwan: Bentuhua*. New York: Palgrave Macmillan.

McCoy, Alfred W. 2003(1972). *The Politics of Heroin: CIA Complicity in the Global Drug Trade, Afghanistan, Southeast Asia, Central America, Columbia*. Chicago: Lawrence Hill Books, Revised edition.

タイ語

Kanchana Prakat-uthisan. 1990. *Kongphon 93: Phu Opphayop Adit Thahan Chin Khana Chat bon Doi Phatang*. Chiang Mai: Business Marketing Chiang Mai.

註

- 1 財団法人中華民国建国一百年基金会の2010年12月29日付の公告 (http://www.taiwanroc100.org.tw/event_content.php?am_id=3&ag_id=57&ac_id=208) [2012年2月16日確認]
- 2 「孤軍後裔遭拘留 移民署: 逾期居留需遣返」[中国広播公司, 2011年2月1日午後3:43] (<http://tw.news.yahoo.com/孤軍後裔遭拘留-移民署-逾期居留需遣返-20110131-234317-130.html>) [2012年6月6日確認].
- 3 本稿において台湾史の時代区分は学界の慣例に基づき, 日本統治時代(1895-1945)を近代, 中華民国時代(1945-現在)を現代とする. そのため現代台湾と(1949年以降の)中華民国(略称は華)とを, ほとんど同じ意味で使用している場合もある. また, 単に戦後と言った場合は第二次大戦後を指す.
- 4 本稿で用いる言論空間とは, ある時空において, 具体的に言えば現代台湾において, 政治とメディアの相互作用の中で台湾社会一般に広く定着した雰囲気(およびその広がり)を意味している.

本稿がこれから議論を展開するように, こうした雰囲気は, 国家権力とメディアのみならず, 柏楊という作家や, 台湾社会に生きる人々, さらに孤軍と呼ばれた人々の様々な言動が相互に交差して形成されている. したがって, 単に言論空間としてひとまとまりにするのではなく,

- その内実についてのさらなる考察が必要になろう。この点については、今後の課題としたい。
- 5 石炳銘 [2008] 所収の中華救助総会「序言」(p.4) には、総人口5,6万、70-80の華人村と記載されている。
 - 6 例えば柏楊 [1982], 石川誠人 [2008], 覃怡輝 [2009], Gibson & Chen [2011]. 他に『雲南文献』所収の関連論文。
 - 7 例えば Chang [1999], 張雯勤 [2002].
 - 8 例えば McCoy [2003(1972)].
 - 9 例えば鄧賢 [2000], 柏楊・汪詠黛 [2007], 陳文政 [2010] およびその DVD.
 - 10 例えば片岡樹 [2004], 木村自 [2010], 王柳蘭 [2011].
 - 11 例えば卓遵宏・龔学貞・張世瑛 [2002]
 - 12 例えば李明錫 [2005] 桑元元 [2010], 尹光保・葉瑞其 [2011].
 - 13 例えば陳鴻瑜 [1986].
 - 14 例えば泰北孤軍後裔 [1995], 江元慶 [2001]
 - 15 確かに、卓遵宏・龔学貞・張世瑛 [2002] 所収の張世瑛「〈導言〉異域孤軍外一章：忠貞新村的故事」[p.III および p.15] が、泰緬孤軍のイメージはかつて反共言説の中にあっただけ指摘している。しかし、残念ながら3, 4回変化したイメージについての言及はない。
 - 16 現代台湾史における本土化とは、「台湾それ自体になる」あるいは「台湾自身のものになる」を意味する。つまり、「台湾になる」という意味であり、「中国本土に近づく」という意味ではない。「本」という漢字は、「わたくし本人」、「本書」、「本校」という単語があるように、「それ自体の」や「自分自身の」を意味している。先行研究を借りるなら、本土化は台湾化のみならず、土着化、現地化、民主化にも換言できる。[John Makeham, A-chin Hsiau (ed.) 2005.]
 - 17 タイでの臨地調査は三回にわたり、どれも非常に短い期間の定点観測になった。一回目は2008年11月25-26日にチェンライ県メーサロンで個人的に実施する。興華学校で当地の成立について簡単な説明を受けることができた。二回目は2011年5月11-16日にチェンマイ県およびチェンライ県の複数の華人村で実施する。全日程を中華救助総会主催の支援事業「中華救助総会2011年関懐泰北華文教育参訪」へ参与した。三回目は2011年10月6-13日にチェンマイ県およびチェンライ県の複数の華人村で実施した。両地の雲南会館が主催する中華民国百周年記念事業をそれぞれ参観した。日程の大部分は泰国世界日報社の視察への同行である。日程の最後には、中華救助総会が興華学校で開催する教育支援事業「中華救助総会2011年泰北華文学校校務経営管理研習計画」の一部を参観した。二、三回目の調査では、長時間にわたる自動車での移動が、関係者への聞き取りを可能にした。中華救助総会（台北）への主な訪問は2008年12月22日、2010年5月26日、2011年3月25日、2011年7月15日、2011年10月4日の5回である。調査言語は全て中国語（北京語）による。
 - 18 本稿では、文脈に応じて国民党軍を国軍と表記する場合がある。というのは、次のような理解

が現代台湾史研究では慣例になっているからである。すなわち、1947年の憲政開始に際し、国民党軍は党の軍隊から国家の軍隊へ法的地位が変化している。ただし、国共内戦が続き、戒厳令により憲法の機能が凍結している状況であったため、実際は国軍は国民党の軍隊のままであったのだった。

- 19 本稿「はじめに」で列挙した論著の他に、沈克勤 [2002: 307-368] の「(拾) 金三角孤軍忠魂」、および雷雨田 [2000?] をも参照した。
- 20 ここで列挙する歴史的経緯については、主に以下の論著を参照して主軸にしている。『泰北義民文史館誌』、柏楊・汪詠黛 [2007: 16-29, 35-36]、覃怡輝 [2009]。必要に応じ、前述した先行研究をも参照した。
なお、覃怡輝 [2009] の年表が非常に詳細で、大変参考になる。
- 21 本稿第二節で後述する鄧克保『異域』(1961)によると、地図上の第一次中緬大戦とは、1950年6月から8月までの戦争であり、第二次中緬大戦とは、1953年3月から4月までの戦争である。兩大戦はそれぞれ『異域』の第三章と第五章の章題になっている。
なお、『異域』には第二次中緬大戦の開始を1953年5月21日と記している個所がある(第五章の七)。しかし、別の個所(第五章の一)では1953年3月と記してある。覃怡輝 [2009] を参照すると、戦後処理を議論するためにバンコクで米華泰緬の四国会議が1953年5月22日から始まるため(本稿第二節で後述)、やはり戦争開始は3月21日と考えるのが妥当である。
また雲南反攻というのは、1951年5月から7月までに中華民国軍が米軍の支援を得て行った作戦である [覃怡輝2009: 79-90]。
- 22 興味深いことに、この電文は後に国民党が出版した秦孝儀 [1984] に収録されていない。覃怡輝 [2009: 149] が写真を掲載しており、撒光漢 [2011: 25-26] でもこれを文字化している。
- 23 救総については、主に同会刊行物を参照した。中国大陸災胞救済総会 [1999]、中華救助総会 [2000?]、中華救助総会 [2004]、葛雨琴 [2005]、中華救助総会 [2010] など。
- 24 ただし多くの関連資料とは異なり、メーサロン(後述)に設置された「泰北難胞茅屋改建磚瓦房落成碑記」(中国語とタイ語での碑文)には、上書が1953年11月であったと刻まれており、上書の時期についてはさらなる考証が必要である。碑文の中国語版は、中国大陸災胞救済総会編 [1999] に転載されている。
- 25 特戦教導総隊とは指導員の部隊であり、この中に張蘇泉(書全)という人物がいた。彼は黄埔軍官学校出身で、後に麻薬王の異名をとるクンサー(張奇夫)の参謀になる。
- 26 R. Cline は後に蔣経国の伝記を書いてもいる [Cline1989]。Cline の中国名は、「雷」を「萊」に代える場合もある。
- 27 1954年及び1961年の二度の撤退で台湾へ来た人々は、1992年に台湾桃園市で「国雷聯誼会」という会員組織をつくる。2011年には中華民国100年を記念し、「国雷聯誼会会員誌」を刊行している。

- 28 この中に若き日の覃怡輝も含まれていた [撒光漢2011: 109]。覃怡輝とは泰緬地域における国民党軍の歴史的事実に関して、本稿が最も信頼して依拠する先行研究『金三角国軍血涙史』を著した人物である。
- 29 『異域』は元々、夕刊紙『自立晩報』が1961年から始めた連載であり、「鄧克保」という署名の入った「血戦異域十一年」と題する一連の文章であった。原題での単行本化もあったものすぐに発禁処分を遭う。まもなく、鄧克保 [1961] として出版され、広く流通した。正式な再版の他にも、多くの海賊版まであった。同一内容で類似の題名、続編を騙る書籍まで登場するありさまだったという。『異域』の出版事情について、本稿は主に『中国時報』(1977年11月3日)を参照した。
- 30 柏楊 [2000] のカバーの文章によると、「柏楊思想與文学国際学術研討会」(香港大学亜洲研究中心, 1999) で議論になったようだ。同会議の成果は、後に黎活仁等編 [2000] になる。
- 31 柏楊 [2000] によると、『異域』はまさにベストセラーであり、売り上げが1977年の段階で66万冊、2007年には200万冊を超える。台湾の大学センター試験には「作文」(日本での小論文に相当?) という科目があり、かつて「私に大きな影響を与えた本」という課題で一番多く取り上げられたこともあった。また、1999年には香港の『亜洲週刊』で「20世紀中国語小説ベスト100」が企画され、投票の結果は35位だったという。
- 32 『血戦異域十一年』の発禁処分の理由や、『血戦異域十一年』と『異域』の異同について、筆者は審らかにできていない。
- 33 二度の撤退は共に滇緬泰国境地帯からなので、「滇緬義胞」である。確かに、高雄県美濃鎮(現在の高雄市美濃區)には「滇緬義胞農墾村」がある。しかし「滇緬義胞」という呼称は歴史的にも使用例が少なく、現在では「泰北義胞」(北タイからの義の同胞) という呼称が一般的になっている。これは、次節で考察するように、1980年代初頭に「送炭到泰北」という支援活動が始まり、泰緬孤軍の持つ空間的なイメージからビルマが希薄化し、北タイが前面に出てくると関係していると推測できる。
- なお、義胞と呼ばれた人々は、何も滇緬泰(あるいは泰北)からの約12,000人(7,000人+5,000人)だけではなく、1955年に大陳(浙江省沖の小島)から約28,000名が台湾へ移動しており、彼らは大陳義胞と呼ばれている。類似の概念として、1954年、朝鮮戦争における人民解放軍捕虜の中で送還先に台湾を選んだ人々が、反共義士と呼ばれた。また、人民解放軍(空軍)のパイロットで台湾へ亡命した者も反共義士と呼ばれる(1960年代に始まり1980年代末までに、十数回発生している)。
- 34 桃園県内の忠貞新村を訪問して編集したオーラルヒストリーが、卓遵宏 [2002] である。
- 35 台湾の南北に走る中央山脈を東西に横切る東西横貫公路沿いに、泰緬義胞が他の退役軍人たちと共に開拓した清境農場(南投県)がある。中でも清境農場の博望新村が、泰緬孤軍の創設した村である。台湾への移転及び台湾でのコミュニティー建設については、李明錫 [2005] およ

- び桑元元 [2010] に詳しい。清境農場は埔里から原住民蜂起の霧社事件 (1930) で有名な霧社を越えて、更に先へ進むと到達する。同地は、かつて日本植民地時代に見晴 (みはらし) と呼ばれた場所で、亜熱帯及び熱帯の台湾にもかかわらず、冬は降雪があるほど標高が高い (海拔約2000m)。泰緬の山岳地帯と、気候や景観も似ているという。現在では台湾で最も海拔の高いセブン・イレブンがある。滇緬泰の習俗は、観光材料になっている。更に詳しい情報が、仁愛郷清境社区發展協会 [2005] や尹光保・葉瑞其 [2011] にある。
- 36 第一次撤退 (1953-54年) の6750人の内、957人が桃園県中壢龍岡に、第二次撤退 (1961年) の4406人の内、約300戸が桃園県龍潭の干城五村、206人が南投県清境農場、674人が高雄県高雄農場吉洋分場、248人が屏東県大同合作農場に配置された [尹光保・葉瑞其2011: 40-41]。
- 37 柏楊の逮捕は、「柏楊大力水手事件」(柏楊ポパイ事件) と呼ばれ、『異域』とはほとんど関係ない。ポパイ事件については、邦語では小山三郎 [2008] が参考になる。
- 38 剿共とは共産党を殲滅すること。
- 39 タイ軍部は泰緬孤軍を九十三師と呼んできた (「奇異的九十三師」[柏楊1982: 119-122])。かつて国民党軍九十三師が抗日戦争期に中緬国境の景東 (ビルマのシャン州にある景棟 / **Keng Tung / Chiang Tung / ケントウン / チェントンのこと**) で、自由タイと合作して日本軍に抵抗しており、タイ軍部にはこの時の印象が残っていたからだという [沈克勤2002: 320]。なお未見ながら、タイ語で九十三師と題して泰緬孤軍を論じたものが、**Kanchana** [1990] である。著者のカンチャナーは〇四指揮部で軍務についた人物であるという [片岡樹2004: 195]。
- 40 この人物には自伝 (つまり [陳茂修・田景燦2008]) がある。自伝の編者の序文などによると、〇四指揮部で軍務を共にしたカンチャナーが **Kanchana** [1990] の中で陳茂修に言及しているだけでなく、**Kanchana Prakat-uthisan. 2005. *Set. Choen Mou Sio Mangkon doi haeng Kongthap Kokmintang*. Bangkok: Sayamrat Printing.** (『陳茂修参謀：国民党軍山地の龍』) という伝記をも書いているという。
- 41 北タイ華人村では、以下のような泰緬孤軍の勲功を称える話が今なお伝わっている。すなわち、北タイでの剿共を失敗し続けてきたタイ国軍にとって、考柯・考牙戦役での勝利は重大な意義を持つ。もし泰緬孤軍による協力がなければ、北タイ (の山地) の大部分は共産主義者に占領されたままであっただろう。そのためタイ国王は泰緬孤軍に感謝し、タイ国籍を付与したのである、と。確かに柏楊も類似した話題を紹介している [柏楊1982: 165-170]。
- 42 ムスリム (回族) が多く、馬を使い交易する生活の故に、「馬幫」(隊商, **Caravan**) と呼ばれていた。木村自 [2010] などの木村自の諸論考に詳しい。
- 43 柏楊のルポルタージュは、とりわけ女流作家曾焯の存在を台湾、香港、東南アジアの中国語世界へ紹介している。同書によれば、曾焯は四川隆昌の人で、1952年に生まれ、中国の文化大革命で雲南省のビルマ国境付近の村に下放され、その後、村を脱出し越境して泰緬孤軍の村へたどり着く。メーサロン (**Mae Salong**) の興華中学とバンヒンテーク (**Ban Hintaeak**, 満星豊。

- クンサーのかつての拠点) の大同中学で教鞭をとるものの、クンサーにいらまれたため、パサン (Pa Sang) でひっそり暮らしているのだという [柏楊1982: 203-207]。彼女は1983年に台湾へ渡り、台湾大学中文学科を卒業後、軍の運営する『青年戦士報』新文芸副刊の編集を務め、現在は『青年日報』副刊の主編を担当しているようだ。今や現代台湾で名の知れた作家になっている。泰緬孤軍に関係する主な作品は、小説『美斯樂的故事』(台北: 時報文化, 1982)、小説『満星曇的故事』(台北: 時報文化, 1987)、『闖蕩金三角』(中国知青民間備忘文本) (北京: 中国工人出版社, 2002)、ルポルタージュ『末路天堂』(台北: 黎明文化, 2004) 等。新谷秀明 [2004: 207-223] によると、処女作『七彩玉』(台北: 中央日報社, 1979) が自伝小説であり、彼女が雲南から北タイに至るまでの経緯が描かれている。
- 44 「送炭」は「雪中送炭」や「雪裡送炭」という成語に由来し、困難に陥っている他者に対し適切な救助の手を差し伸べることを意味する。
- 45 汪詠黛「掲開異域孤軍の神秘面纱」[柏楊・汪詠黛2007: 10]。
- 46 工作団の活動については、特に龔承業 [2007] および石炳銘 [2008] が詳しい。二著の著者はともに工作団で中心的役割を担った人物である。
- 47 王室プロジェクトについては、中華民国駐タイ代表 (大使) である沈克勤が、特に台湾との関係に即して自らの回想録 [沈克勤2002] で言及している。同書第一章「秦王山地計画」は、元々『世界日報』(バンコク) が2000年6月12日から19日までに連載した。同書は、1960年代半ばから1980年代末までの中華民国 - タイの関係を知る上での貴重な証言になっている。『世界日報』という新聞については、黄根和・林信雄・孫国楠 [2005] に詳しい。
- 48 1993年には、同じく朱延平監督の『異域2: 孤軍』(英題: A Home Too Far 2) が製作されている。ただ原作者の柏楊は自らの同意を与えていないとして、裁判を起こす。後、違反なしの判決が出たようだ。ちなみに、こちらは邦訳吹き替え版がある。
- 49 ちなみに、香港では中国語映画全タイトル121本中の73位である。港台の両地での評価の違いは、台湾における泰緬孤軍への関心の強さを物語っている。興行成績の典拠は台湾が、「(台湾票房1990) <台湾電影資料庫> (http://cinema.nccu.edu.tw/BOX/3A/3A90.HTM) [2012年2月23日確認] であり、香港が、「香港電影票房1990 [華語電影] <香港電影票房全紀錄> (http://www.angelfire.com/home/bobic/HK_Movies/HK/hk1990c-b5.htm) [2012年2月23日確認] である。
- 50 近年判明したように、「アジアの孤児」(作詞、作曲、編曲: 羅大佑, 1983年) には、映画『異域』の上映当時 (1990年代初め) の視聴者が知るはずもなかった興味深い成立背景があった。実は1980年代初め、羅大佑は内に戒厳令下で弾圧が横行し、外に米華断交で国際的に孤立した台湾の姿を思い、呉濁流『アジアの孤児』(1945年脱稿, 1946年日本語版, 1959年中文訳版) から題名を借りて、「アジアの孤児が風にさらされて泣いている」と歌おうとする。すると国民党政府の検閲に引っかかった。そこで羅大佑が「赤い悪夢、インドシナ半島の難民への」と

- いう副題を付けたところ、検閲を通過できたという。「歌的故事 / 羅大佑『亜細亜の孤児』原来是指台湾人民?! (2009年3月14日) < NOWnews 今日新聞網 (http://www.nownews.com/2009/03/14/340-2421878.htm) [2012年2月15日確認].
- 51 どちらも1950年代に成立し、前者は1975年の中華人民共和国 - タイの国交樹立に伴い、タイが中国側の要請を受けて台湾に撤去を要求したため、消滅する。後者は1987年の台湾からの大陸訪問の再開に伴い、正面からの情報収集が可能になり、1991年にその使命を終えた。国民党が中国大陸で展開した諜報活動全般については[楊瑞春2010]に詳しい。
- 52 香港での難民救援活動について、林芝諺[2011]が詳しい。主な救援団体は救総であり、舞台は調景嶺である。
- 53 中泰団は、1980年に中華民国における19の団体が合同して成立した組織である。構成団体には、中国国民党の各委員会、中華民国の各省庁、救総のような政府外郭団体、慈善団体、宗教団体などが含まれている。中泰団の構成団体の中での中心的な存在は、中国人権協会であった[陳鴻瑜1986]。中国人権協会の後身にあたる中華人権協会のサイト (http://www.cahr.org.tw/tops/) によれば、中泰団は1993年に国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR, United Nations High Commissioner for Refugees) と共同でタイでのカンボジア難民救援活動を終了させると、1994年には拡大改組して中華人権協会傘下の台北海外和平服務団 (TOPS, Taipei Overseas Peace service) となり今に至っている。
- 54 「別訣山荒」[柏楊1982: 209-213].
- 55 そもそも「難民条約」(1951年)が難民の発生源を「迫害の恐怖」に求めるのは、東側を牽制しようとする西側の政治的意図を受けていたからだと言われている。加藤節・宮島喬[1994: 1-20, 21-52] (特に加藤節「一章 国民国家と難民問題」および広部和也「二章 難民の定義と国際法」)。ただし1980年の段階でタイも中華民国も「難民条約」に加盟していない。
- 56 本稿では断らない限り、華僑・華人・華裔を区別せずに使用している。華僑・華人の概念定義の難しさについては、戴国輝[2011]の第三章「新しい華僑観を求めて」に所収の論文(ほとんどが1970年代に執筆)が参考になる。第二次大戦後の中台それぞれの華僑に対する政策については、夏誠華[2005]の第二編「僑務編」の第一章と第三章、および陳鴻瑜[2000]が台湾側の視点として、呉前進[2003]が中国側の視点としてそれぞれ参考になる。
- 57 1984年にタイは内戦終結を宣言しており、泰北孤軍の難民村は武装解除されて、1986年に行政権限が軍から内務省へ移譲されている[片岡樹2004: 197]。そこで本稿の以下の記述は孤軍に「元」や「旧」という語を付す。
- 58 陳情した議員の一人が葛雨琴であり、これがきっかけになり彼女は救総の活動に参加する。1992年から理事を、2004年から2012年まで理事長を務めた。
- 59 救総の構造改革(2000年代初頭)については、[頼威志2009]に詳しい。
- 60 民間の支援団体は、救総のほかにも、「送炭到泰北」以来、独自に支援を続けてきた台湾明愛

会が有名である。

- 61 泰北義民文史館は表向きは資料館であるものの、実は忠烈祠(中華民国の国立戦没者追悼施設)の意味合いが強い。国民革命に殉じた人々を祀るため、かつて忠烈祠がチェンライ県メーサロンに設立された。1980年代に泰北孤軍がタイ政府に帰順しタイへ帰化するに伴い、忠烈祠は廃止される。その跡地には、興華学校が移転して今に至る。現在(2011年秋)、隣県のチェンマイ県にも記念施設として泰北異域孤軍戦史記念館を建設する計画があり、すでに用地が購入済みである。ただし計画立案者は救総でない。
- 62 [中国大陸災胞救済総会編1999: 1-2] に所収。
- 63 [『泰北義民文史館誌』: 6-7] に所収。
- 64 この点については陳文政 [2010] およびそのDVDに詳しい。陳文政は、近年の北タイの雲南人の帰属意識が中華民国(台湾)、中華人民共和国、タイ国の間で揺れる気持ちを描く。とりわけ北タイの中華学校および北タイから中国への留学生を対象にして、ますます台湾化する中華民国(台湾)でなく、いっそ中国(人民共和国)を選んでしまおうという若い世代の孤軍後裔に注目している。こうした若い世代の存在は、台湾の言論空間にとって意外であった。
- 65 今なお、中華民国は在外投票を認めておらず、国外在住の「中華民国自由地区人民」は帰国してようやく選挙権を行使できる。ただし、泰緬孤軍の子孫の多くは中華民国国籍を持たないから、そもそも選挙権がない。
- 66 北タイ華人のタイ化は、単に華僑華人自らの課題であったり、台湾の政策が背景にあったりするのみならず、タイの難民政策や移民政策とも密接な関係にある。本稿は主に台湾における泰緬孤軍イメージを議論するため、詳細な議論は避けたものの、タイの政策については、玉田芳史 [1999]、小泉康一 [2005]、玉田芳史 [2006]、久保忠行 [2009]、竹口美久 [2011]、片岡樹 [2013] に詳しい。
- 67 なお「泰緬地区華裔難民」の国籍をめぐる問題については、特に断らない限り以下の論著を参照した。「人球、棄児、身分証」,[柏楊・汪詠黛2007: 176-199]。「劉小華の人生日記: 生活版」(<http://thebesthouse.pixnet.net/blog>)の関係記事(特に「一路走来: 在泰緬難民争取国籍歷程」[全36編]と題する文章)[2012年2月22日確認]。ただし、「泰緬地区華裔難民」の国籍問題は、事実関係が審らかにしきれず、法律が複雑すぎることから、関係者でも十分な把握ができておりと言い難い。本稿でもつじつまの合わない個所があるものの、まずは概要の把握に努め、関係文献を相互参照してできる限り整合性を追究した。
- 68 「泰北清菜地区難民聯絡弁事処簡報」(1994年6月14日)の「一、村の概況」。このパンフレットは[泰北孤軍後裔1995: 137-148]に所収。このような、北タイの華人村が台湾側に向けて説明した村人の理想や成功譚は、[柏楊・汪詠黛2007: 180]でも類似した言及がある。
- 69 中華民国-タイの国交が1975年7月1日に断絶すると、同年9月10日に「華航代表弁事処」(中華航空代表事務所)がバンコクにて大使館業務を担う。その後、1980年に「駐泰国遠東商務処」

1991年に「駐泰国台北經濟貿易中心」、1992年に「駐泰国台北經濟貿易弁事処」、1999年に「駐泰国台北經濟文化弁事処」へ改名して現在に至る。

- 70 タイ山地民の法的身分については、片岡樹 [2013: 244] に詳しい。片岡論文はさらに詳細な考察として、玉田芳史 [2012] を挙げている。また柏楊・汪詠黛 [2007: 195, 197] では旧泰北孤軍の関係者に付与された身分証が、大きく4種類紹介されている。
- 71 管見の限り、台湾側の関係資料では齊しく、タイが1985年に泰北孤軍の難民村に対してタイ化政策を展開したと説明されている。例外が二つあり、沈克勤 [2002: 338-339] がタイ化政策の起点を1984年6月にしている。また、撒光漢 [2009: 324] によると、タイ国国務院(内閣?) が1984年6月12日に「タイ国で生まれた子女は、帰化してタイ国籍になる」という法案(?) を通過させたという。しかしながら、1985年(もしくは1984年)にタイでどのような法令が出たのかについては不明。日本における研究論著として、玉田芳史 [1999]、玉田芳史 [2006]、竹口美久 [2011] を参照したものの、1985年の法的根拠に関連する事柄は把握できなかった。引き続き調査が必要である。さらに撒光漢 [2009: 324] によると、2003年にタイ国内政部は、旧滇緬辺区游撃隊の残党7,000人が帰化してタイ国籍になることを同意し、それにもれた人々についても帰化手続きを進めているようである。
- 72 ちなみに僑務委員会が近年発行する中国語学習のための教科書は、華僑の居住地に合わせた内容になっている。北タイ版には、チェンマイの夜市の話題などが登場する。
- 73 2009年に、同団体は中華民国内政部認可の社団法人 NPO「泰緬地区華裔難民權益促進會」(理事長劉小華) となっている。同会のサイト <http://thebesthouse.h.bmwedu.com/>
- 74 1961年の第二次撤退の後、タイに残留した第三軍と第五軍は、中華民国国軍が泰緬両国にもはや存在しないという国際政治の設定に合わせるため、自らが国軍であることを示す物品をすぐに処分した。そのため、両軍の子女である孤軍後裔の多くは、記憶に頼るほかには、両親および自らの身分を証明する方が無かった。
- 75 三民主義に基づき五権分立した国家権力の一つであり、官吏を監督し視察する機関。
- 76 「6月10日起 泰緬国軍後裔可合法在台居留」[中央社(中央通訊社) 記者陳俊諺台北8日電, 2009/06/08] (<http://tw.myblog.yahoo.com/glic5311-yahoo/article?mid=15901&next=15549&l=f&fid=67>) [2012年2月22日確認]。
- 77 1999年5月21日以前の来台者はどのように扱われたのか。2009年6月の時点ではその時期の該当者がそもそも存在しないと看做されたのか。本稿では審らかにできなかった。引き続き調査する必要がある。
- 78 総統陳水扁は「台湾之子」を自任し、これを新しい国民の理想の自己像に掲げた。「新台湾之子」は、それ以上に新しい存在として、台湾社会から出現した概念である。楊瑪利・楊艾俐 [2004] に詳しい。
- 79 とりわけ花嫁不足は農村のみならず、晩婚化の進む都市部でも顕著であった。東南アジア出身

の花嫁と台湾人男性との結婚はさまざまな衝突を生み出しやすく、いわゆる混血児が学校や社会で異質視されて、国政から地域社会までを貫く社会問題になっている。新移民の人口の数値は内政統計年報 (<http://sowf.moi.gov.tw/stat/year/list.htm>) に基づく。新移民については楊瑪利・楊艾俐 [2004] に詳しい。また田上智宣 [2010] も参考になる。

- 80 この座談会は、[覃怡輝2009] の出版を記念したもので、その詳細は『雲南文献』第39号所収の参加記に詳しい。
- 81 「303」 (<http://viewpoint.pts.org.tw/?p=1124>) [2012年6月6日確認]。
- 82 「移行期における正義」(transitional justice) とは、権威主義体制から民主主義体制への移行過程において発生した人権侵害や残虐行為(正義問題、司法問題)を如何に処理するのか、という問いをめぐる議論である。ただし、正義の問題は常に移行過程にあるから、あらゆる社会が直面しているともいえる。また、「移行期の正義」は復讐-赦しの座標軸と、記憶-忘却の座標軸の交差する四象限で、その性格が分析される場合が多い [土佐弘之2004]。

The Portrayal of the ‘Isolated Forces in Myanmar and Thailand’ in Contemporary Taiwanese History: The Case Study of Incomplete Taiwanization

WAKAMATSU Daisuke *

Abstract

This paper aims to analyze the portrayal of the Isolated Forces in Myanmar and Thailand in contemporary Taiwanese history, and to point out the problem of national identity in contemporary Taiwan. The Isolated Forces have been perceived in many different ways in contemporary Taiwanese history, including as a moral people, as refugees, as an overseas Chinese population, and as new immigrants. In general, they have been regarded as fellow countrymen when referring to of ‘ourselves’ in Taiwanese public discourse.

The change in perception of the Isolated Forces is related to the change of national identity in contemporary Taiwan from Chineseness to Taiwaneseeness. At one time ‘ourselves’ regarded the Isolated Forces in high esteem when anti-communist movements swept the country. But as the present idea of Taiwaneseeness takes hold, the new ‘ourselves’ is hesitant whether the Isolated Forces are to be included in ‘ourselves’, since they have not had any historical experience in Taiwan.

Keywords

Taiwanization, Northern Thailand, Alien Realm, New Immigrants, Remaining Force

* Correspondence to: WAKAMATSU Daisuke
Researcher, the Kyoto University Asian Studies Unit (KUASU), Kyoto University, Japan;
2F, Faculty of Letters East Building, Yoshida Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501 - Japan.
E-mail: dwakamatsu@yahoo.co.jp